

生きる力をはぐくむ

道徳教育実践ハンドブック



平成21年3月

大分県教育委員会

発刊にあたって

平成20年3月に新学習指導要領が告示され、道徳については、総則、総合的な学習の時間、特別活動とともに、平成21年4月から新教育課程での実施が求められています。

そのため、県教育委員会では、本年度内、市町村教育委員会の協力を得ながら「新教育課程説明会」を開催し、県内すべての先生方に新学習指導要領に関する内容を周知することにより、新教育課程への円滑な移行及び実施が図られるよう努めてまいりました。

道徳については、道徳の時間が道徳教育の「要」であることや校長の方針の下で道徳教育の推進を主として担当する教師を中心とした推進体制を整備すること、学校の特色や児童生徒の発達段階を踏まえた重点的な指導を行うことなどが示されています。

一方、県内の道徳の時間の状況を見ますと、読み物資料だけを使う画一的な道徳の時間の指導や道徳教育と道徳の時間の乖離など、道徳に対する理解の不足に起因すると思われる課題が指摘されております。

このような状況を踏まえ、県教育委員会では県内の道徳教育の中核的指導者の先生方にご協力いただき、道徳に関する基本的な事項や具体的な事例及び新学習指導要領に関する内容を掲載した「道徳教育実践ハンドブック」を作成しました。

先生方には、日頃の道徳教育や道徳の時間の指導に際して、キャッチフレーズのよう「いつでも、どこでも、なんどでも」活用していただくことで、各学校の道徳教育を一層推進することにより、豊かな心をもつ児童生徒の育成に役立てていただければ幸いです。

最後に、本ハンドブックの刊行にあたり、多大なご協力を賜りました編集委員・執筆委員の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成21年3月

大分県教育庁義務教育課長

三 浦 徹 夫

目 次

I 道徳教育を進める上で理解しておきたい10の疑問

<道徳教育>

- 1 道徳教育と道徳の時間をどのように進めていくか? 1
- 2 学級経営に道徳の時間をどう位置づけるか? 3
- 3 道徳教育の中で特別活動はどのような役割を担っているのか? 5
- 4 体験活動はなぜ大切なのか? 7
- 5 家庭や地域との連携はどう図るべきか? 9

<道徳の時間>

- 6 小・中学校で指導過程に違いがあるか? 11
- 7 子どもが自分のよさを見つめる資料選びはどうすればよいか? 13
- 8 子どもたちにどのように問いかけるか? (発問) 15
- 9 子どもの考えが深まる話し合い活動にするにはどうすればよいか? 17
- 10 道徳的実践力を高める板書はどのように工夫するのか? 19

II 道徳の授業づくりに参考にしたい10の実践

<内容項目別>

- 1 きまりの大切さについて考えた事例 21
- 2 社会参画することの大切さについて考えた事例 22
- 3 協力することの大切さについて考えた事例 23
- 4 自分たちの生活とのかかわりから法について考えた事例 25
- 5 命の大切さについて考えた事例 27

<指導方法別>

- 6 資料提示を工夫した事例 29
- 7 体験活動と関連させた事例 31
- 8 人材を活用した事例 33
- 9 心のノートを活用した事例 35
- 10 話し合い活動の充実を図った事例 37

III 新学習指導要領を理解するための5つのポイント

- 1 校長の方針の明確化と推進体制の構築 39
- 2 道徳教育推進教師の役割 40
- 3 学校の特色や子どもの発達段階を踏まえた3つの「重点」 41
- 4 望ましい自尊感情を育てるために 42
- 5 子どものよさに目を向けた児童生徒理解 43

資料

- 子ども(教師)が感動する資料情報 44
- 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表 45

I 道徳教育を進める上で理解しておきたい10の疑問

<道徳教育>

- 1 道徳教育と道徳の時間をどのように進めていくか？
- 2 学級経営に道徳の時間をどう位置づけるか？
- 3 道徳教育の中で特別活動はどのような役割を担っているのか？
- 4 体験活動はなぜ大切なのか？
- 5 家庭や地域との連携はどう図るべきか？

<道徳の時間>

- 6 小・中学校で指導過程に違いがあるか？
- 7 子どもが自分のよさを見つめる資料選びはどうすればよいか？
- 8 子どもたちにどのように問いかけるか？（発問）
- 9 子どもの考えが深まる話し合い活動にするにはどうすればよいか？
- 10 道徳的実践力を高める板書はどのように工夫するのか？

2 学級経営に道徳の時間をどう位置づけるか？

1 学級の実態に即して「重点を置いて育てたい内容項目」を明確にする

先生たちの声



学級が落ち着かないって言うか、思いつきでしゃべるって言うか…。困ってるのよね。

集団生活

自分の意見がしっかり言えてすごく活発なんだよね。次から次に考えが浮かぶみたいなんだ。もっといろんな人の考えを知って発表し合えるといいな。



寛容の心



友だち関係づくりがうまくないのか、トラブルが多いんだよね。仲間はずしもあるし、気になるな。学級経営は人間形成上望ましい資質を育てていく、そのために教師が意図的に働きかけて集団を向上させるんだって、先輩の先生が言ってたけど、悩んでしまうよ。

信頼・友情

行事でも学習でも一人ひとりが、すごくがんばっていいわ。学級のみんなで、がんばれるよう、もっと周りの友だちと支え合っている団結力を伸ばしてあげたいわ。



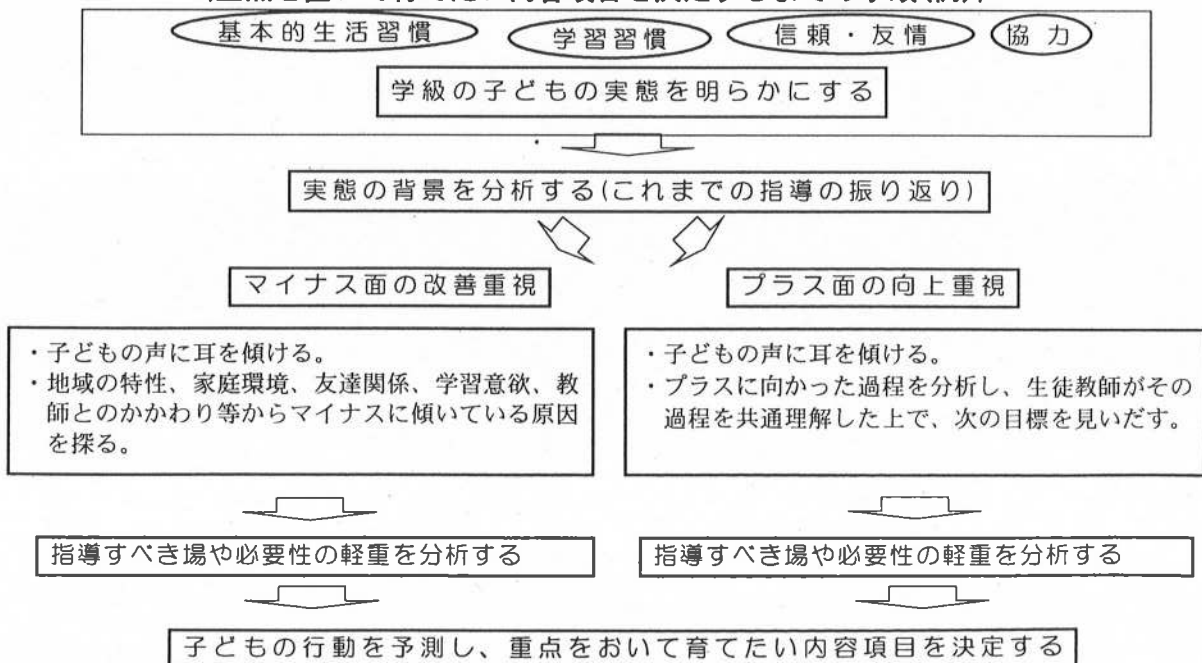
協力

このようなことを感じたり、声を聞いたりしたことはないだろうか。

子どもの実態を見つめると多くの課題が出てくるが、学級経営を行う場合には、目標に向けて、どのような場で取り組んでいくのかを見通すことが求められる。

たとえば、基本的な学習習慣や生活習慣については、日常の指導の中で重点的に取り組み、友達との信頼・友情や集団内における責任感や協力する態度を培うことについては道徳教育の中で重点を置いて育てたい内容項目として位置づける。

〈重点を置いて育てたい内容項目を決定するまでの手順(例)〉



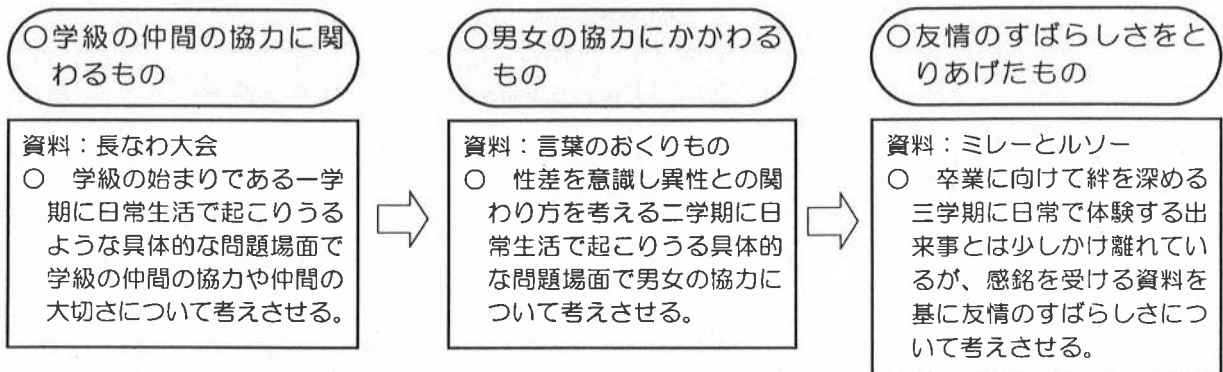
2 内容と時期を考えて、道徳の時間に重点を置いて取り組む

重点を置いて育てたい内容項目は、要である道徳の時間においても重点化して取り組むこととなる。しかし、年間35時間の中で、学習指導要領に示されたすべての内容項目について取り上げる必要があることから、重点化する一つの内容項目について扱う時間は、3～4時間程度が限界と考えられる。

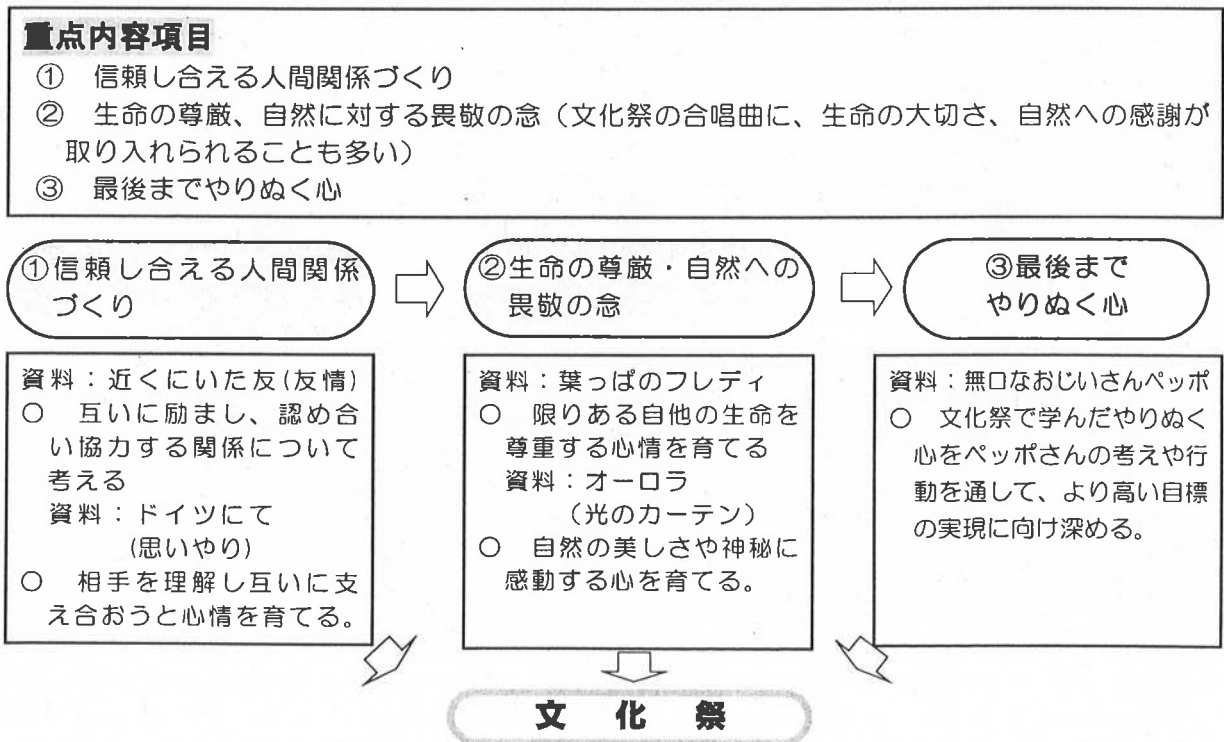
また、道徳の時間がより効果的に要の役割を果たすように、他の教育活動の指導や子どもの成長を考慮した上で指導する内容や時期についても十分に検討する。

なお、重点化の具体的な例としては、次のようなことが考えられる。

〈例1：子どもの成長を考慮し各学期に1時間の指導を行う場合 信頼・友情(小学校5年生)〉
 《一学期》 《二学期》 《三学期》



〈例2：文化祭への取り組みと関連させ、集中して指導を行う場合(中学校1年生)〉



ワンポイントアドバイス

道徳教育は、子どもたちの成長とその過程での課題を想定し、計画的に授業を積み重ねることが大切であり、まさに先手の教育といえる。

3 道徳教育の中で特別活動はどのような役割を担っているのか？

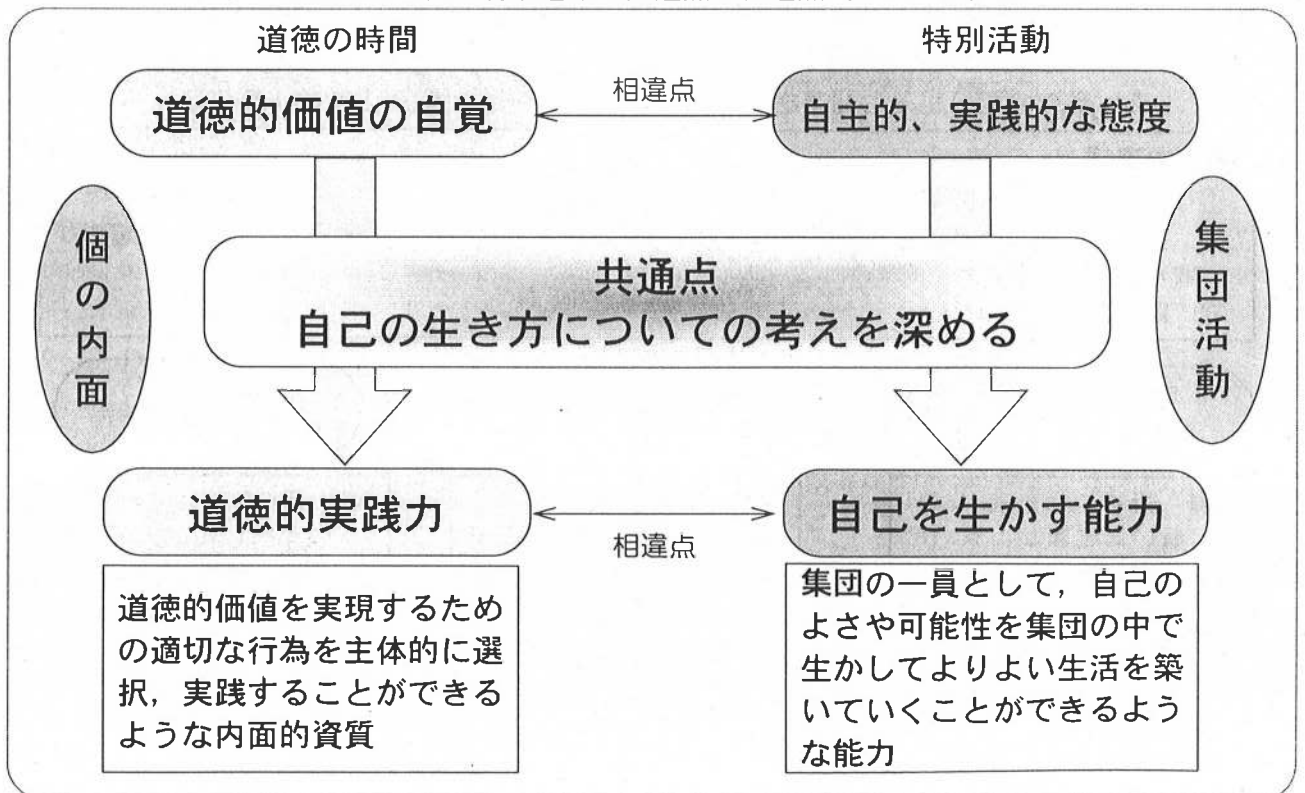
1. 道徳の時間と特別活動、それぞれの特徴を理解する

道徳の時間と特別活動の特徴を理解するためには、学習指導要領の目標に焦点を当て、その共通点や相違点から考える必要がある。

＜学習指導要領の目標＞

道徳の時間	特別活動
道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。	望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

＜道徳の時間と特別活動の共通点と相違点（イメージ）＞



この図からもわかるように、道徳の時間は子どもが自己の内面に向けて働きかける学習活動に対して、特別活動は集団活動の中で他者に向けて働きかける実践活動という明確な違いがある。

その上で、「自己の生き方についての考えを深める」という共通の表現を用いているのは、道徳の時間と特別活動の両者を密接に関連させることが、道徳教育を充実させるために大きな役割をもっている。

2 道徳の時間と特別活動の関係を理解する

明確な違いがある道徳の時間と特別活動の具体的な関係を理解することで、道徳教育の中で特別活動が担う役割がみえてくる。

下の図は、その具体的なイメージの一例である。

＜道徳の時間と特別活動の関係（イメージ）＞



道徳教育において、実践活動の多い特別活動は、特に重要な役割を担っている。それは、特別活動での多様な経験に照らして道徳の時間に自己を見つめるからこそ、道徳的価値の自覚を深めることができ、また、道徳の時間に道徳の実践力を高めるからこそ、特別活動において具体的な実践で自分を試してみる力が生まれるからである。道徳の時間と特別活動は逆の方向に位置しているからこそ、それぞれの役割を担ってかかわり合うことが可能となる。

新学習指導要領では、道徳の時間等との関連を図りながら各教科等の特質を踏まえた適切な指導をするようになっているが、その際は、上の図の特別活動を他の教科等に置き換え、矢印の言葉を教科等の特質で表現すると理解しやすい。

ワンポイントアドバイス

Q：「自己を生かす能力」とは、どのようなものか。

A：「自己を生かす能力」は勝手気ままな行動を意味するのではなく、自己の個性や能力・適性等を十分に理解するとともに、それらを創造的に発展・伸長させることにより、現在及び将来にわたって他者と共生しながらより充実した生活を送ることのできるような自己実現を図るための能力である。

たとえば、学んだことを日々の生活で生かすことや集団活動において自分にできる役割などを進んで行おうとする態度などに見ることができる。

子どもたちが自分たちで考え、取り組もうとするような働きかけを教師が大切にしていけば、それが子どもたちの充実感につながる。

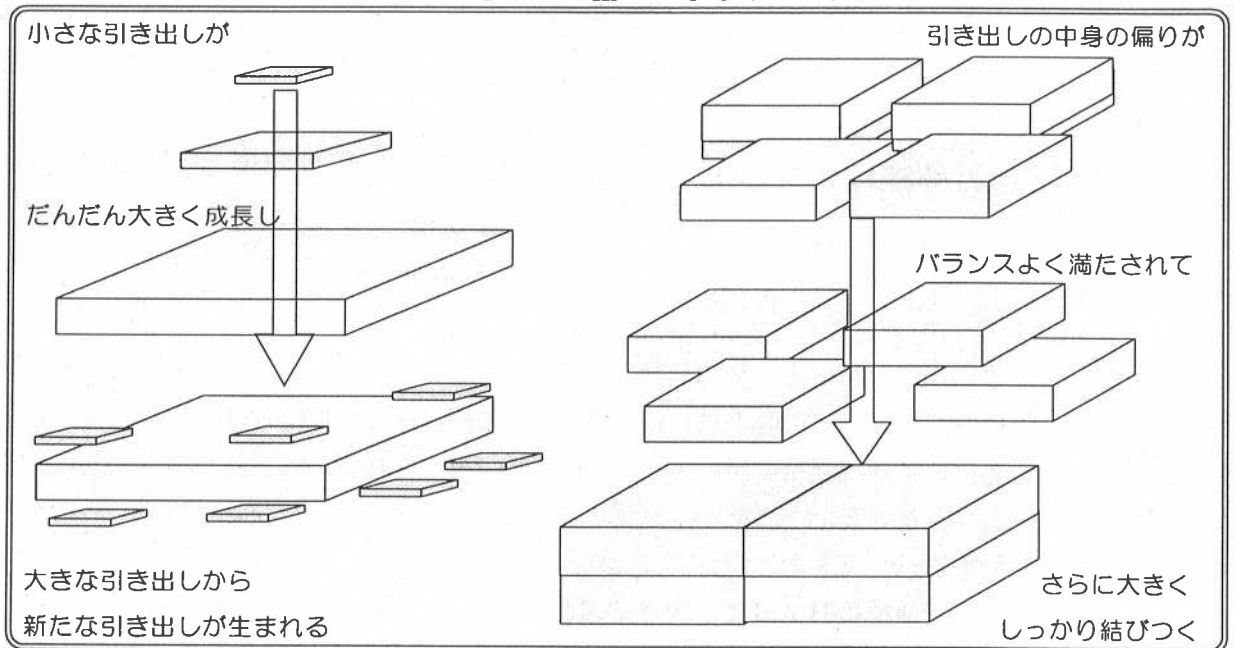
4 体験活動はなぜ大切なのか？

1 子どもたちの「心の引き出し」を豊かにする

子どもたちは、いろいろな道徳的価値の入った「心の引き出し」をもっている。しかし、その引き出しに入っているものの質や量は子ども一人ひとりでは異なり、また、引き出しによっても偏りがある。それは、子どもたち個々の生活経験の異なりを反映していると考えられる。しかも、現代社会のように生活がシステム化・パターン化されている中では、様々な「人・こと・もの」にふれる機会は減少しており、子どもたちが引き出しに納める道徳的価値は少なくなっていると思われる。

そこで、子どもたちの活動時間の約 1/3 ほどを占める学校生活の中での体験活動を充実させることにより、「心の引き出し」の中身をより豊かにしていくことが大切なのである。

＜心の引き出しが豊かになるイメージ＞



2 道徳の時間の指導をより効果的にする

(1) 道徳の時間における体験の意義

「手品師が待ち望んでいた大劇場での出番を断ってまでも、少年との約束を守ったのはなぜか？」(資料：手品師)など、道徳の時間では、資料に登場する主人公等の自分とは異なる人物の生き方について考える学習が中心となる。

そのとき、子どもたちは何を根拠に、問いに対する答えを探すのだろうか。

その根拠が自分自身の体験なのである。したがって、体験が質的にも量的にも豊かであるほど、他者の生き方について広く深く考えることができる。

相手の心の動きは、自分の体験に照らしてしか理解できない。

シュプランガー (教育学者：ドイツ)

(2) 道徳の時間に体験活動を生かす視点

中津市立北部小学校（平成 17・18 年度文部科学省研究指定校）では、道徳の時間に体験活動を生かす視点として、次の 3 点を挙げている。

① 道徳的価値の意識化を図る

普段は何気なくやり過ごし、気づかない道徳的価値に気づかせることを意味している。そのためには、機会やタイミングをとらえた教師的的確な助言や支援が必要となる。

② 話し合い活動の土台づくり

「心の引き出し」に納められた道徳的価値と同じだと考えられる。子どもたちは、その中から自らの考えの根拠となる価値を取り出し、それを土台として考えを表出していく。

③ 道徳的実践力の発揮の場

道徳の授業で育てた道徳的実践力を基盤に、体験活動の中で具体的な道徳的実践として発揮する（教師としては発揮してほしいと願う）ことを意味しています。教師は、道徳的実践力が道徳的実践として現れたときには、機をのがさずに認める声かけをすることが、道徳性を育てていくためにとても大切になります。

(3) 道徳の時間と体験活動を関連させる上での留意点

① 道徳の時間の前に行う体験活動と関連させる場合

「この体験をすれば、こんなことを感じるはずだ」という教師の思い込みをしないことが大切である。なぜなら、同じ体験でも、子どもの心のアンテナの方向や感じる周波数は一人ひとり違うためである。

また、道徳の時間では、考えの根拠を必ずしも共通体験に求めるとは限らないので、教師が考えの範囲を共通体験のみに絞らないように留意する必要がある。

② 道徳の時間の後に関連する体験活動を行う場合

「道徳の時間の学習がすぐに行動に現れることを求めるものではない点」に留意して、子どもたちを温かく見守ることが大切である。

いずれにしても、「道徳の時間ための体験活動」や「体験活動を円滑に実施するための道徳の時間」にしてはならない。

ワンポイントアドバイス

Q：体験活動によって、子どもたちの「心の引き出し」に同じ道徳的価値を入れることが必要なのか？

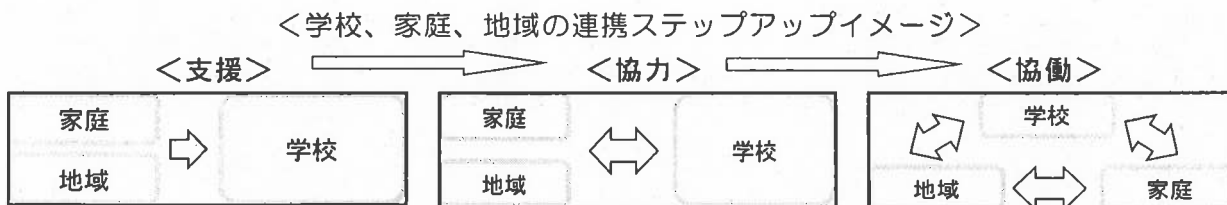
A：同じ価値を入れる必要はない。指導する教師としては、この子にはこんな価値を引き出しに入れてほしいとの願いをもつことは必要だが、体験活動の中で感じ、出会う道徳的価値は様々で、どれを引き出しに入れるかは子どもたち自身が行うことである。

ただし、北部小学校の視点③のように、教師のサポートが何もなければ、引き出しに入れることなく過ぎてしまう場合があるので、教師の的確な助言や支援が大切になる。

5 家庭や地域との連携はどう図るべきか？

みなさんの学級・学年・学校における家庭や地域との関係は、下の図のどれにあたるだろうか。

どちらかという、これまでは家庭や地域が学校を「支援」する傾向が強いように感じられる。今後は、矢印を双方向にして、次のステップである「協力」へ、さらには「協働」へと連携の絆を深めていくような取り組みが求められている。



1 保護者や地域の人たちに道德の授業を見てもらう（協力）

(1) 地域の題材や親しみのある資料を取り上げる。

特に、保護者や地域の方々に授業を公開する場合は、誰もが知っている親しみのある資料や地域に残る伝承や人物を資料化するなどの取り組みが望まれる。そのような努力は、参観者に喜びや驚きをもたせるだけでなく、授業公開をきっかけにした連携の強化や資料づくりによる教師の授業力の向上にもつながる。

(2) 参観者も一緒になって考えることができる課題を位置づける。

また、授業では、子どもたちだけでなく参観者も一緒になって考えることができるような課題を位置づけ、場合によっては参観者の考えも聞いてみるなど、開かれた授業を工夫することも大切である。そうすることにより、参観者の授業や学校に対する親近感が増してくるとともに、時には、教師が気づかなかった見方・考え方を教えてくれることにもなる。

(3) 参観者の感想を大切に受け止める。

特に、懇談会等を開くことは、直接意見交換することにより、相互理解を深める絶好の機会となる。時には、授業の在り方や道德教育の取り組みに対して厳しい意見をいただくこともあるとは思いますが、それこそが、授業公開で最も期待するものである。

地域の方の厳しい声を「厳しさは学校に向けられた期待」と受け止め、全教職員が前向きに道德教育に取り組んでこそ、家庭や地域と連携して、豊かな心をもった子どもたちを育てることができる。

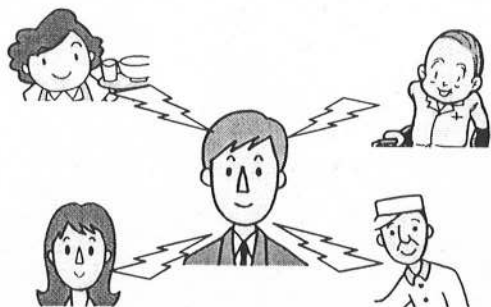
＜授業公開を実施する上での主な留意点＞

- ◇ 公開対象を保護者や学校評議員などに限定せずに、広く地域の方に呼びかける。
- ◇ 授業で使用する資料を配布するなど、授業の内容を理解してもらう工夫をする。
- ◇ 保護者や地域の方も参加した授業を実施する。
- ◇ 公開後に、授業や道德教育についての懇談会等を開いたり、アンケートなどを実施したりして、保護者や地域の方々の声を聴く。 など

2 地域のために学校ができることからスタートする（協働）

「協力」から「協働」へと連携の絆を深めていくためには、学校が地域のために「何ができるか」という視点が重要になる。しかも、その取り組みには教育的な意義が十分に含まれている必要がある。

（1）地域のニーズをとらえるアンテナとネットワークをもつ。



学校が地域のためにできることをするためには、当然、地域が何を求めているかを把握する必要がある。そのためには、教師一人ひとりが地域に対してアンテナを向けるとともに、地域に積極的に出て行く機会をつくることで、情報を得るためのネットワークをつかっていくことが大切である。

（2）具体的な活動イメージを描く。

学校には地域の核となり、子どもたちをおして地域のために行動できる潜在力がある。地域により特色や事情の異なりはあるが、実践していくためには、それをどのように活動として具現化していくかを日頃からイメージしておくことが大切である。



（3）子どもたちの主体的な活動を組織する。

学校ができることとは、「教師ができることではなく子どもたちができること」ととらえる必要がある。それも、教師が活動のルールを敷いて子どもたちがその上を滑っていくような活動ではなく、子どもたちが主体的に考え、判断し、行動できるような活動でなければならない。そのような活動こそ、多様な道徳的価値と出会ったり、道徳的行為を実践する場となる。そのためには、次のような点に留意する。

- ◇ 客体である子どもたちを主体へと導く手立てをもっているか。
- ◇ 子どもたちにとって失敗や困難を乗り越える場があるか。
- ◇ 地域の様々な人たちとともに活動するなど、かかわる機会が十分にもてるか。
- ◇ 地域の人たちの喜びを自分の喜びと受け止め、活動に対する達成感をもてるか。
- ◇ 地域社会の一員としての自覚を深めていくことができるか。など

ワンポイントアドバイス

地域のニーズを把握するアンテナは、地域がとらえている子どもたちの姿を把握するアンテナにもなる。道徳性の育ちは見えにくいものだが、協働体制がしっかりすれば、多くの「眼」で子どもたちの変化を見つめることができる。

6 小・中学校で指導過程に違いがあるか？

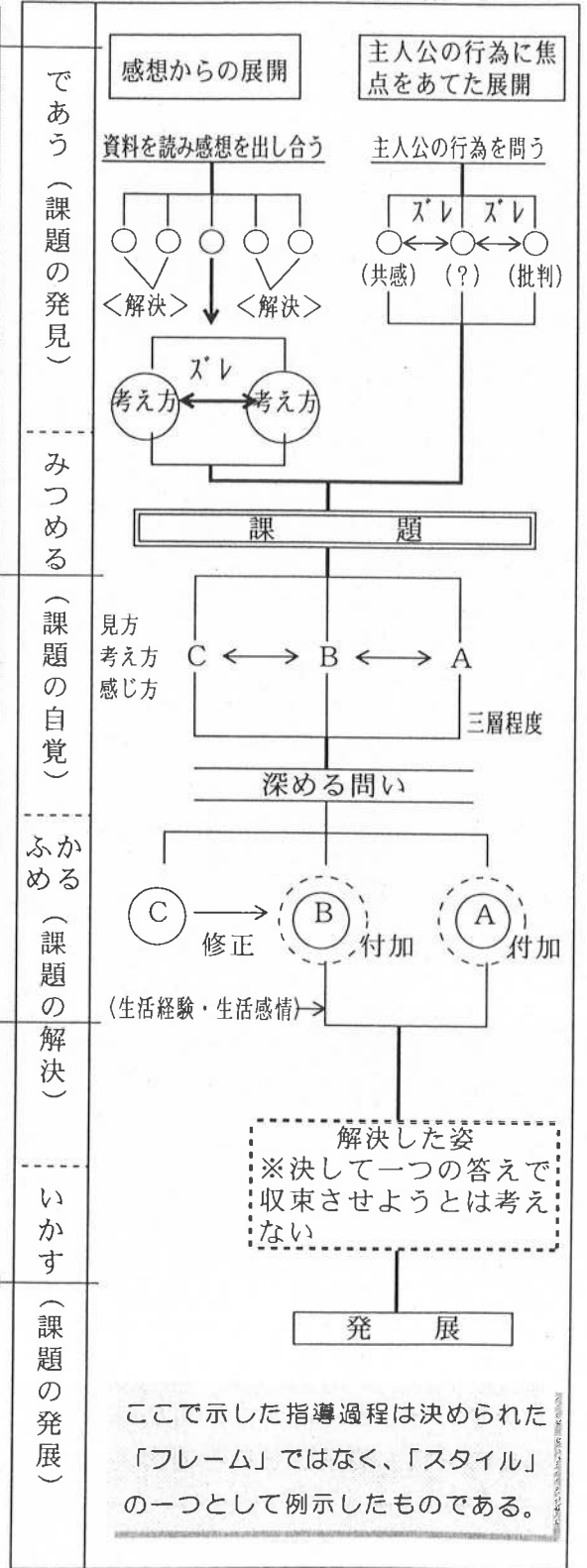
指導過程は大筋同じであるが、道徳性の発達の段階に違いが出てくる。

1 指導過程の構造と指導の配慮点

指導の配慮点

- 資料との出会わせ方
 <感想をもとに展開する場合>
 ・感想を十分出し合う場を設ける。
 ・個の感想を大切にしながら、ねらいの中心となる場面の行為に目を向けさせる。
 <主人公の行為や生き方に、ある程度焦点をあてて展開する場合>
 ・主人公の生き方や行為の善し悪しを問題にする。
 ・共感、批判の違いを明らかにするために、十分話し合う場を設ける。
- 主題に関わる問題意識をもたせる導入
 ○資料の導入に興味や関心をもたせる導入
 ○統計資料や写真、映像、新聞記事等の活用の工夫
- 課題に対して、自分なりの考え（答え）が持てるようにするために、考える場を保障したり、書く活動を設けたりする。
- 児童生徒の考えの根拠となるものを板書に位置づける場合は、考え方の違いを明確にし、自分の考え方と他の考え方との異同が明確になるように留意する。
- 児童生徒の実態と資料の特質を生かした発問
 ○指導を深める場の設定
 ・ペア、グループ等の小集団による話し合う活動
 ・同じ考えの生徒同士の補強する場
 ・違う考えの生徒同士の問答の場
 ・自分の考えをまとめて書く活動
- 必要に応じて、児童生徒の固定した考えをゆり動かす問いを用意しておく。
- 児童生徒が、自分の考えを補強したり、修正したりするために、異なった見方・考え方に合わせる場を設ける。（道徳の時間の中心となる活動）
- 資料の主人公の生き方や行為と自分の生活経験・生活感情とを重ねて話すことができるように留意する。（体験活動との関連）
- 過去（今まで）、現在（今）、将来（これから）の自分とつないで考えさせ、自信や意欲を持たせる場を設ける。
 ・新しい考え方で友だちの良さを見つける活動
 ・書く活動 ・人材の活用 ・本の紹介等
- 考えたことや新たにわかったことを確かめる。
 ○学んだことを更に深く心にとめる。
 ○各教科等との関連を図り、今後の発展につなぐ

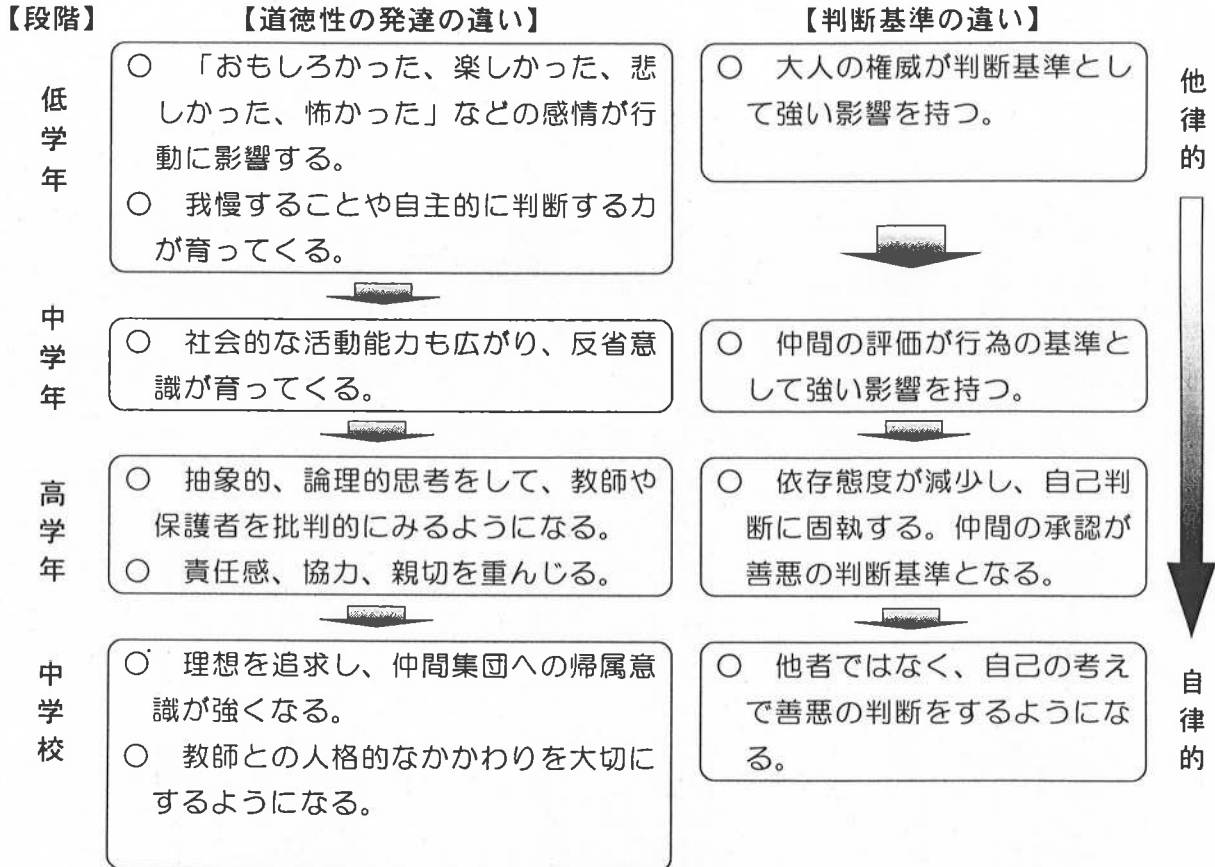
指導過程の構造（例）「未来を拓く」より



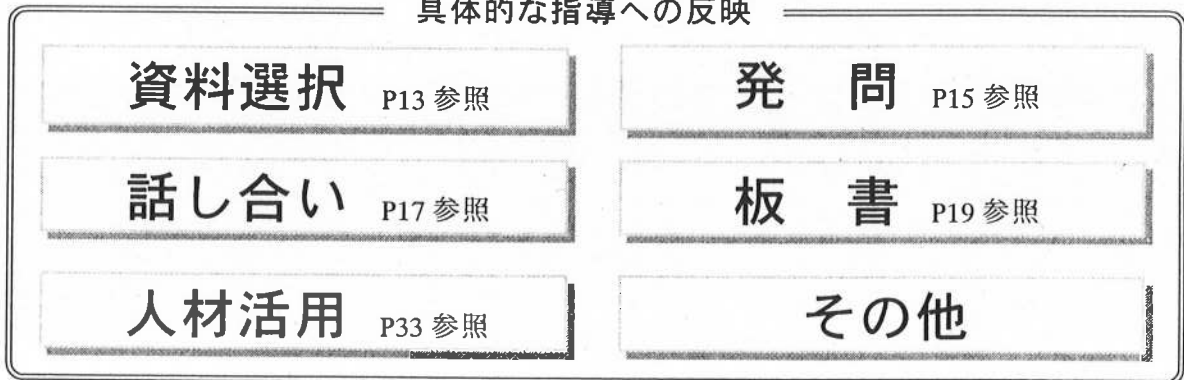
ここで示した指導過程は決められた「フレーム」ではなく、「スタイル」の一つとして例示したものである。

2 価値追求のもととなる道德性の発達の違い

子どもたちの内面的な発達の段階をとらえておくことは、発言の背景など児童生徒理解に欠かせないものである。その上で、道德の時間の指導過程における具体的な指導を組み立てることが重要となる。



具体的な指導への反映



人間関係の不思議は、相手の中にあると信じたものが育っていくことである。

ニコライ・ハルトマン

7 子どもが自分のよさを見つめる資料選びはどうすればよいか？

1 子どもが自分のよさに目を向けられるような資料がよい

「子どもが自分のよさに目を向ける」とはどんなことでしょうか？
子どもは自分のことをどのくらい知っているのでしょうか？
特に自分のよさを知っているのでしょうか？

自分のよさを知らない
子ども

自分のよさを少し知っ
ている子ども

自分のよさをよく理解
している子ども

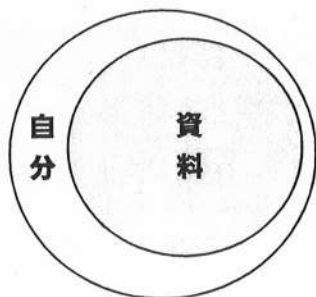
こういった子どもたちの実態をわれわれ教師はよく見取る必要がある。そこに道徳資料の存在意義があると言える。資料を媒介として子どもたちは自分の足りない点、もっとこうあった方がいい点、よい点に気がついていく。つまり道徳における資料とは、自分を映し出す鏡のようなものだと言うことができる。そして、それを追求していくことによって一人ひとりが価値の自覚を深めていくことになる。その際に注意することは「子どもたちのマイナス点ばかりを見ない」ということである。子どもたちのマイナス点にばかり目を向けると「子どもたちのここをよくなければ」という意識が働き、子どもたちの生活の中で起こった身近な問題を扱いがちになる。例えば子どもの作文を資料として扱えば、それは鏡にはならず、自分自身を見てしまうことになる。そうすると、なかなかものが言えなかったり、価値の押し付けに感じられたりして、子どもにとっても教師にとっても楽しくない授業になりやすい。

2 子どものよさと主人公との接点が見つけれられる資料がよい

子どもと資料の関係を図で表してみる。

(1) 近くて遠い資料

まず上記に挙げたように、自分たちの実態とまったく同じような資料を扱った場合は下図のように<自分>と<資料>の接点がほぼ同心円になる。



例

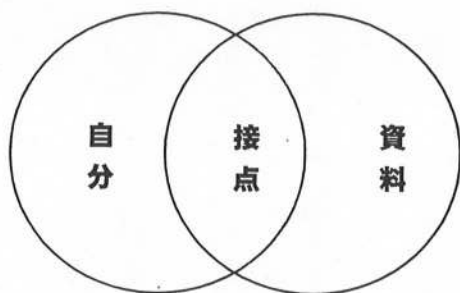
最近クラスでドッジボールをしている時に判定をめぐるトラブルが起きた。そこで教師はそのことを題材にした子どもの作文を教材として道徳の授業を行った。

実態は子どもたちの生活に近い（あるいはそのまま）が、ものが言えなかったりして価値の自覚の深まりに関しては期待できない。

(2) 遠くて近い資料

次は、一読した感じでは自分たちとはなんら関係のない話（動物が主人公だったり、外

国の話だったり) だが、追求していくうちに段々と自分たちとの接点に気づいていくような資料を扱った場合の図である。



例

「セロひきのゴーシュ」

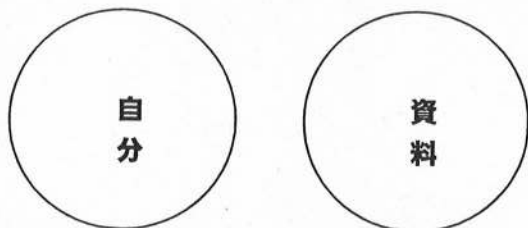
- ・動物の森が舞台
- ・動物が主人公
- ・仲間からの励まし
- ・自分のがんばり



一見自分たちとは無関係のように感じるから、子どもたちは自由に意見を出しやすくなる。しかし、段々と「これは自分にも似たところがあるぞ」と感じてくる。資料の上から言った意見と自分の本音とのずれを追求することで価値の自覚が深まる。

3 子どもの夢や希望につないだ驚きや気づきのある資料がよい

では、左図のように自分と資料の接点がまったくなさそうな場合は、道徳の資料にはふさわしくないのか。

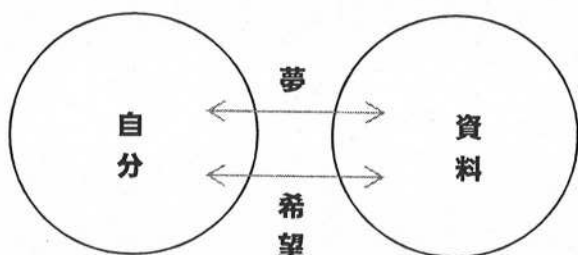


例

「野口英世」「エジソン」等の偉人は、子どもたちにとって対象が偉大すぎて、なんら自分との接点を見出せないように思える。

新学習指導要領、第3の指導計画の作成と内容の取り扱いの中で次のように記されている。「先人の伝記、自然・伝統と文化スポーツなどを題材とし児童が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、児童の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。」

偉人やスポーツ選手の伝記等は子どもたちにとってあこがれであり、リアリティがあり誰にでも感動を与える資料である。そこで子どもと資料を「夢」や「希望」というキーワードで結んでやる必要がある。そして、その主人公の考え方を少しでも取り入れていう思いを喚



例

「オードリー＝ヘップバーン」

- ・バレリーナになる夢
- ・挫折
- ・夢をあきらめず希望を持ち続ける（ここがつなぐ部分）
- ・女優としての道が開ける

8 子どもたちにどのように問いかけるか？（発問）

1 道徳の時間における発問は、心を拓く鍵である

道徳の時間では、互いにこだわりを出し合い多様な考えをぶつけ合いながら自己の考えを高めることが大切なので、子どもたちが心を開いてのびのびと自己表現できるような問いかけを心がけほしいよね。

一人ひとりの子どもの心の内にある考え方や感じ方を問うのですから、正答誤答の出る問いかけはなじみません。子どもたちが自分自身を正しく表現しようとしていれば、どんな答えも受け入れるべきです。

子どもたちがもつこだわりや疑問などの「心のひっかかり」「心のつぶやき」を学級全体のものとするために、教師が投げかけること大切ですよね。



学習指導要領解説：道徳（抜粋）

<小学校>

児童の意識の流れを予想し、それに沿った発問や、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを心掛けることが大切である。その際、授業での発問は重要なものに絞られていくことになる。

<中学校>

生徒の実態と資料の特質を押さえた発問構成を工夫するとともに、生徒が体験を通して感じたことや考えたこと、さらに日常の具体的な事柄を話題にするなど、資料に描かれた道徳的価値を自分の問題として受け止め、深く自己を見つめることが可能となるよう、発問の工夫が求められる。

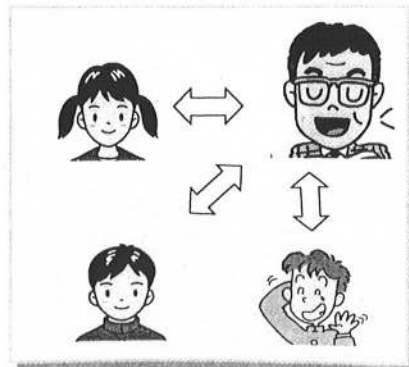
このことからわかるように、道徳の時間における発問は、子どもたちが主体的に道徳的価値を深める鍵である。教師は、子どもたち一人ひとりの心を十分に耕し、拓くことに全力を注ぎ発問を構成することが求められる。

2 心を拓く発問は、新しい価値観の発見につながる

授業の中で、教師が発した発問に対して、子どもたちが教師に向かって答える<例1>のような授業を見かけることがある。しかし、これでは子どもたちが自分とは異なる見方・考え方に触れることはできても、途中で教師の言葉が多く介し、影響を受けるため、主体的に友だちの考えを取り入れて、自分の見方・考え方を付加・修正していくことは期待できない。

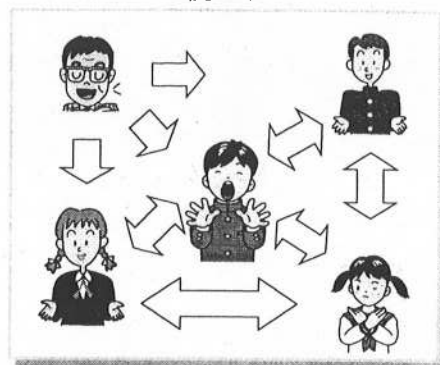
心を耕し、拓くのは子ども自身であるので、教師が発した発問が<例2>のように、子どもたちの中に広がりつつつながりを創り出すようであればならない。その広がりつつつながりこそが新しい価値観との出会いや発見の場となり、

<例1>



子どもたちの主体的な道徳的価値の自覚を深めることになる。

<例2>



ボーリングでストライクが出たときのボール(発問)とピン(子どもたち)のアクションの関係でイメージしよう。

3 子どもの考え方(価値観)によって発問の構成を組み替える

子どもの価値観は実に多様であり、また、自分の価値観にこだわりを持っていることが多い。それは大切なことであるが、一方では、友だちの価値観を受け入れる姿勢も必要である。

このことは教師にも言える。例えば、1時間の授業で教師が予定しているの発問をすべて示したワークシートに沿った授業している場合や、子どもの課題意識とはずれているにもかかわらず、模造紙等に行った発問を黒板に貼り付ける授業などは、教師の一方的な思い込みやこだわりであり、子どもを置き去りにしていると考えべきである。

子どもたちが主役となる道徳の授業を進めるならば、教師は発問のスペアを準備していき、子どもたちの出方に柔軟に対応しながら発問の構成を組み替える必要がある。

— 参考：発問を考える視点(例) —

<子どもたちを主体へと導くために>

- 子どもたちが考えたくなる(考える必然性がある)問い
- これまで考えたことのないようなことを考えようとする問い
- 子どものこだわりや問題意識が生かされ、生み出されるような問い

<話し合いの起点となり、考えを深めるために>

- 他の人の考えを聞きたくなるような問い
- 発言の自由度があり、個性的な考えが生かされ、引き出される問い
- 考える必然性や切実感があり、子どもの心がゆさぶられる問い
- 自問・内省できるような問い

<道徳的実践力を高めるために>

- お互いのよさを認め合うことができるような問い
- 今の自分に自信を持ち、よさをさらに伸ばしていこうとする問い

ワンポイントアドバイス

Q：子どもたちの心の姿で発問の効果を見取ることはできないのか。

A：心の姿は見えないが、心の変化は表情や言動に表れる。それらを次のような心の姿につないで考えてみてはどうだろうか。

- 心が弾む ○心を広げる ○心を鍛える ○心に刻む

9 子どもの考えが深まる話し合い活動にするにはどうすればよいか？

先生たちの声



道徳の時間は、どうしても説教みたいになってしまって、子どもの反応がない…どう思っているの？



発表する子が決まっているし、なかには自分には関係ないって感じて考えていない子もいるし…どうすればいいのかな？

1 外面的・一面的→内面的・多面的な考え方へ向かう話し合いをする

「考えが深まる」とは、子どもがその時間のねらいとする道徳的価値をとおして自分と向き合い、これからどんな自分にしていきたいのかという思いを持つことである。

授業の中で、友達の考えにふれ、自分との違いに気づき、外面的・一面的な考え方から内面的・多面的な考え方へと変容していくことが望まれる。

そのためには、授業において、次のような点に留意する必要がある。

(1) 主人公の心と行動の不思議さを話題にした話し合い

主人公は何をしたか、それはなぜかと主人公の心の有り様を追求するのであるが、子どもたちが資料をとおして「不思議と思うこと」「みんなで話し合いたいこと」を素早く出し合い、話し合う。

そうすることによって、子どもたちが自ら課題を生み出し、意欲をもって主体的に考えることができる。導入段階で長い時間をかけすぎたり、仕切り直しをしたりすると、子どもたちの意欲を削いでしまうので気をつけたい。

(2) 友達の話を聞きたい、自分の話も聞いてほしいと思える話し合い

子どもたちの心は、自分の考えを話したい友達の考えを聞いてみたいという思いで満ちている。また、子どもたちは話すことが好きであり、自分の疑問に対する友達の意見を聞きたいものである。

しかし、文章を手がかりに考えるだけでは、一人ひとりの考えの違いや背景が見えず、同じような言葉としてまとめられてしまい、話し合いにまで発展しない。

そこで、話し合いを活発するためには、「自分がそうだったから登場人物の心もそうであろう」と、子どもたちの経験を手がかりに登場人物の心を追求させていくことで、一人ひとりの考えの違いやよさを浮き彫りにしていくことが大切となる。

また、子どもたちから出された考えを、例えば〇〇の心と●●の心というように類別(類型化)し、話し合いながら、一人一人の考えを授業の中に位置づけていくことも有効である。

そうすることによって、友だちの考えを理解し、自分の考えとの相違点を明らかにしていく。また、話し合いながら自分にはない見方・考え方に気づき、自分の考えを見つめ直すことができる。さらには、子どもたち相互の理解を深めることも期待できる。

(3) 子どもの感動を深める話し合い

子どもが感動を口にしているとき、いろいろ働きかけると冷めてしまうことがある。そんな時は、そっとしておきたいものである。感動を出し合うだけで考えが深まることもある。

そうすることによって、子どもたちは感動に浸ることができる。

(4) まとめの言葉に納得する話し合い

終末に授業を振り返って、教師が「そうですね」とまとめたり整理したりすることもあるが、「今日のまとめの言葉をみんなで考えよう。」と投げかけ、話し合いの中で出てきた子どもたちの言葉からキーワードを見つけるといった展開の仕方もある。子どもたちがまとめの言葉に納得するためには、教師が子どもの発する言葉の中からキーワードを聞き分けるアンテナをもつことが必要になってくる。友達の話を聞いている時、みんながうなづいたなど、話し合いの雰囲気をつかんで授業を展開していくことが大切である。

そうすることによって、「説教みたいな道徳」を防ぐことができ、子どもたちが道徳の時間を好きになることが期待できる。

2 多様な話し合いの場を工夫する

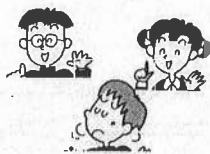
道徳の時間の中心活動は話し合いであり、基本的には学級全体で行われる。しかし、学年が上がるに連れて、子どもたちの発言が少なくなり、話し合いが成り立たないような状況がみられる。また、子どもたちの中には、全体の中で発言することに抵抗感のある子もいる。このような場合には、ペア、グループ等の小集団による話し合いを取り入れる等の工夫をすることも有効である。

どの場面で、どのような話し合いの方法を用いるかは、そのメリット、デメリット等を理解した上で、もっとも効果的な方法を選択することが大切である。

<ペアや小グループのメリット・デメリット例>

【メリット】

- ・意見を出しやすい
- ・人間関係に左右されにくい



【デメリット】

- ・多様な考えにふれにくい
- ・一つの考えに集約され、他の考えが埋没してしまうことがある

【留意点】

- ・意見の出し合いだけでなく、互いの考えを理解するための質問タイムなどの設定
- ・限られた意見に集約せず、多様な考えを全体の中に広げる配慮



例えば、考えの異なる3人による話し合い（3人対話）など、意図的なグループの構成などの工夫が考えられる。

<深める（課題の解決）段階での話し合いの構成例>

話し合いのねらい

話し合いの構成

1 全員が自分の考えを出すために

2 個々の考えを全体の中に広げるために

3 異なった考えを交流するために

4 見方、考え方の違いを明確にして、価値の自覚を深めるために



全体



3人対話



全体

※ 3では代表3人とし、周囲の子どもたちを巻き込みながら、自然な形で4へ移る。

10 道徳的実践力を高める板書はどのように工夫するのか？

[今回、道徳実践力を高める板書計画を、資料『二わのことり』〈2-(3):友情〉の資料を例にしながら、述べていこうと思う。資料については、事前に一読を希望する。]

1 子どもたちの課題が位置付く板書にする

資料と出会った子どもたちは、登場人物の言動に対して何らかの考えを持つ。それを話し合
う中で、登場人物に対しての疑問や共感などが出されるであろう。例えば、資料『二わのこ
とり』で、資料を読んだ後、子どもたちは、次のような感想を出してくるだろう。

- ・ どうして、うぐいすの方に行ったのだろう。やまがらがかわいそうだ。
- ・ やまがらから「誕生日のお祝いをするから来てください。」と言われていのに行かないのはよくない。
- ・ みそさざいのように、山奥の寂しいところに行くよりも明るいところに行くほうが楽しいという気持ちがわかる。
- ・ みそさざいは、うぐいすの家からこっそり抜け出して、やまがらの家に行ったのはえらい。
- ・ みそさざいが、どちらの家に行こうか悩んでいるのがよくわかる。 など

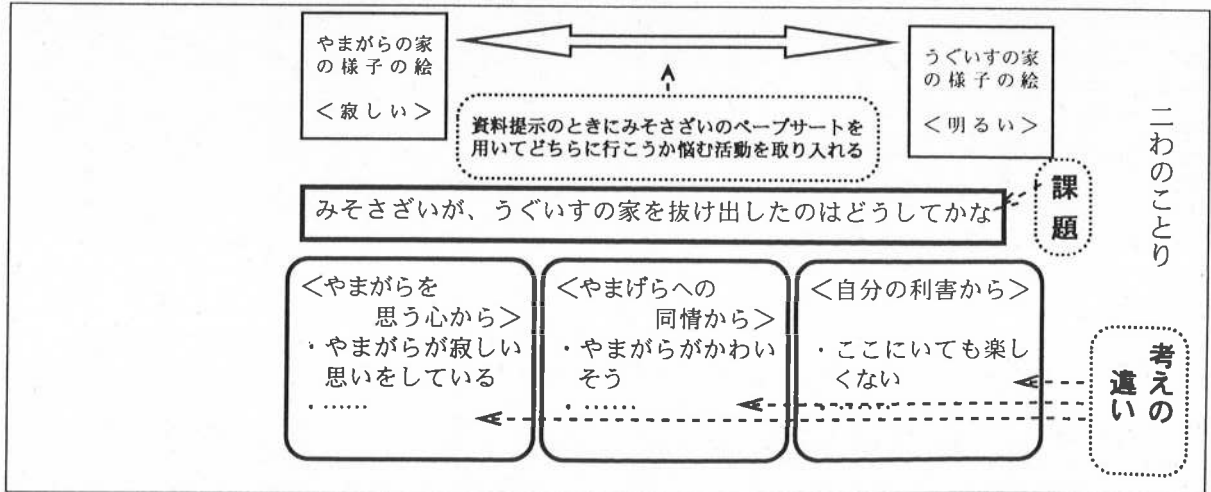
これらの感想を出しながら、その根拠を話し合っていると、一つのことに話題が集中して
くる。この資料では、〈みそさざいはどちらの家に行こうか悩んだすえにうぐいすの家に来て
いるのに、やまがらのことを思い、こっそりとうぐいすの家を抜け出している〉ことをどの子
も話題にしてくるだろう。その共通の話題を課題として板書に位置づけることにより、子ども
たちが授業の主演となるのである。(図(1):課題参照)

2 考えの違いがわかる板書にする

次に、課題に対して子どもたちがどのような考えを発言したか、違いがわかるように整理す
る。子どもの発言をそのまま板書に記入することがあるが、子どもたちの発言の違いが明確に
ならない。子どもの話をよく聞き、同じ考えをまとめて板書するとわかりやすくなる。

この資料では、「みそさざいはやまがらの家にも楽しくない」〈自分の利害から〉「や
まがらがかわいそう」〈やまがらへの同情から〉「やまがらが寂しい思いをしている」〈やま
がらを思う心から〉と考えの違いをとらえた。

〈板書計画〉【図(1)】



3 道徳の学習が劇場になるような板書にする

「板書を工夫したい。」このことは、誰もが考えることである。しかし、現実にどのように取り組んだら、教室が劇場になるような板書になるだろうか？

ここでは、以下の5点を例示するが、これらを参考にして、教師が自分の持ち味を生かした創意工夫した板書にチャレンジしてほしい。

- 黒板の大きさの模造紙を用意し、風景を絵で全体的に表し、登場人物などを挿し絵や吹き出しを使って配置する。
- 黒板の前に実物を設置し、そのイメージを保ちながら資料と出会わせていく。
- 黒板に人物絵や場面絵を配置し、それを移動することで、子どもの想像を逞しくする。
- ペープサートを利用して、それを動かしながら、資料と出会わせる。
- パソコン等を利用して、映画館のように資料を提示する。

道徳の時間に挿し絵や吹き出し、映像資料などを毎時間準備するのは大変なことであるが、子どもたちが楽しく学ぶ場として工夫されたい。

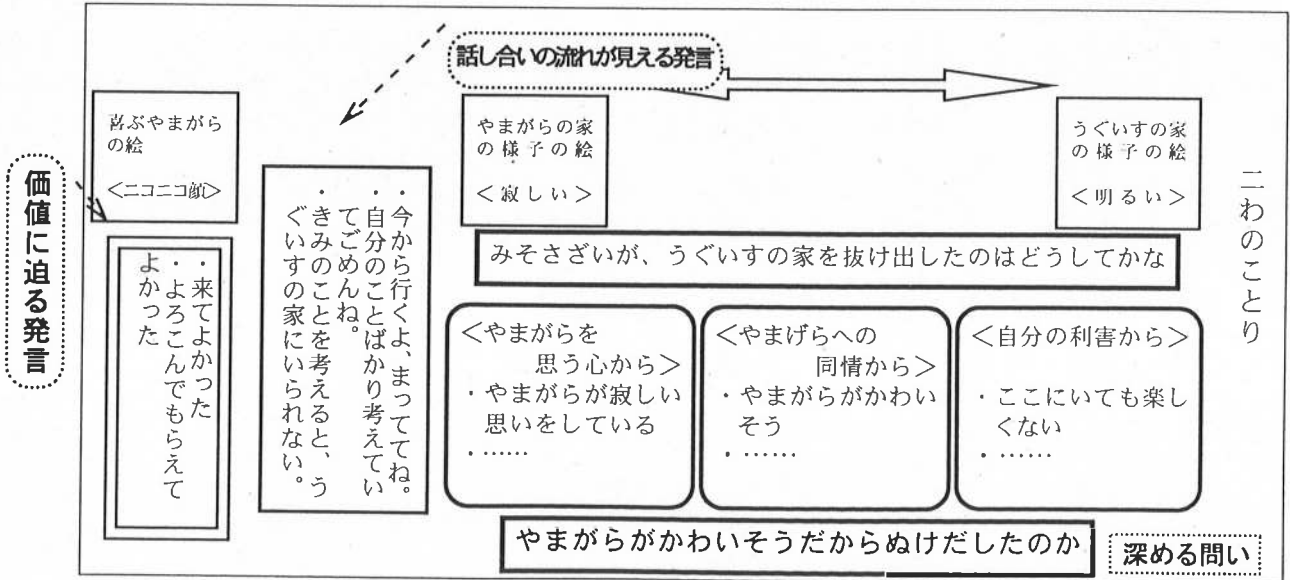
なお、〈板書計画〉【図(1)】にも示したように、今回はペープサートと二つの対比した絵を黒板の左右に配置することで劇的に表してみた。1でもふれたように、授業の主演は子どもたちである。主役になった子どもたちは、必ず生き生きと活躍する。

4 話し合いの流れがみえる板書にする

道徳の時間は、ねらう価値についての自覚を深めるために授業をつくるのであるが、板書をすれば子どもたちはわかっていると思い込みがちである。大切なことは、考えの違いを交流して、より深く価値に迫る手がかりとなる子どもの考えを板書に位置づけることであり、それをしないと価値の自覚が浅いものになってしまう。

今回の資料『二わのことり』では、【図(2)】のように、深く価値に迫る手がかりとなる子どもの考えを引き出すために、〈深める問い〉として、「やまがらがかわいそうだからぬけだしたのか」を準備した。みそさざえは、やまがらのことを考えるといてもたってもいられず、自分だけが楽しむことを考えていたことを反省し、相手の気持ちを考えることの大切さに気づく。さらに、涙を浮かべて喜ぶやまがらを見て、「本当に来てよかった」と思う。子どもたちを、このみそさざえの行為や満足感に浸らせることが、より深い価値の自覚へと導くことにつながるのであり、その過程がみえる板書を工夫することである。

〈板書計画〉【図(2)】



Ⅱ 道徳の授業づくりに参考にしたい10の実践

<内容項目別>

- 1 きまりの大切さについて考えた事例
- 2 社会参画することの大切さについて考えた事例
- 3 協力することの大切さについて考えた事例
- 4 自分たちの生活とのかかわりから法について考えた事例
- 5 命の大切さについて考えた事例

<指導方法別>

- 6 資料提示を工夫した事例
- 7 体験活動と関連させた事例
- 8 人材を活用した事例
- 9 心のノートを活用した事例
- 10 話し合い活動の充実を図った事例

1 きまりの大切さについて考えた事例

<事例：小学校>

資料の概要

食いしん坊で面倒くさがりやの主人公「くろぶたさん」は袋いっぱいにとまったごみを捨てに行く。誰もいない野原や広い牧場や川の中に、「誰もいないから」「広い牧場だから」「川の中だからわからない」と自己中心的な言い訳をしながらごみを捨てようとする。主人公のイラストの横には、その行動を見ている動物たちとそれぞれの吹き出し（空欄）がある。その空欄の吹き出しの中に入る言葉を考えながら、きまりを守る大切さを考えさせることをねらった資料である。

「くろぶたさん、それでいいの?」：新しいどうとく2年 光文書院

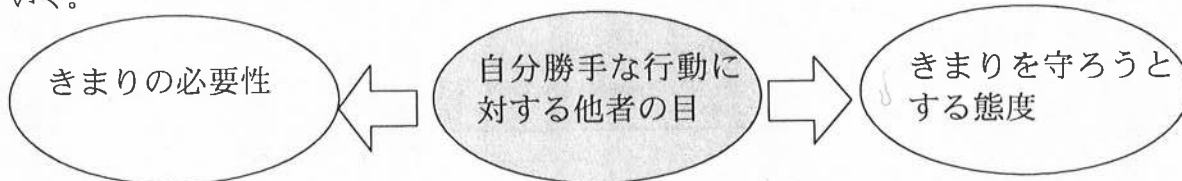
ねらいの焦点化

- 「なぜ守らないといけないのか」について考えさせる。

低学年の児童は、きまりを守らなければならないことは知っているものの、他律的に守らなければならないと考えている段階にある。そこで、「なぜ守らないといけないのか」を学ばせる必要がある。

- きまりを守ることのよさを感じさせる。

この学習では、きまりを守らなければならないことを、「自分勝手な行動がどのような結果をもたらすか」に焦点を当てて考えさせていきたい。自分勝手なことをすると、他者から批判されるものだということから、その批判は迷惑をかけたことからくるものであり、きまりを守るとは人に迷惑をかけずにみんなと仲よく過ごすことにつながるということをとらえさせていく。



学習展開の配慮点

- 第三者の立場で語らせてしまうと、観念的になるおそれがあるので、くろぶたの「めんどうくさい」という気持ちに十分共感させた上で話し合わせていく。
- 「ごみを捨てるとなぜいけないのか」について考えさせる際には、日頃の生活を想起させながら、他者の気持ちに立っての話し合いにしていく。
- 終末では、自分に対する手紙を書くことで自分自身の振り返りをさせる。そして次時には、心のノート『みんなのものだもん』を活用し、きまりがなかったらどういうことになるのかを話し合わせる。

その他

- * 他にきまりの大切さを指導する手立てとしては、《身近なルールについて問いかけるもの》《きまりのない国を想像してみる資料》《きまりを守らないとどうなるかを事例で問いかけるもの》《体育科でゲームのルールをみんなで考える》等が考えられる。

2 社会参画することの大切さについて考えた事例

<事例：中学校>

資料の概要

玖珠町では、全国から訪れる国体選手を受け入れることになった。Bさんのいる地区では、「おもてなしの心」で迎えることとなり、「どんな出会いが待っているのだろう」と胸を膨らませ、民泊に向けて歓迎の計画や郷土料理などの準備を進めてきた。国体開催中は、選手たちを地域ぐるみでもてなし応援した。選手は、“家族”同様に過ごせる雰囲気を楽しみ、試合会場では自分たちへ声援を送る地域の人々の姿に勇気をもらったという。一方、Bさんも、選手から自分や地域が元気をもらったのは、地域社会への参画があったからこそだと語っている。

「民泊を経験して」：玖珠郡中学校道德部会

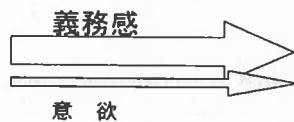
ねらいの焦点化

- 地域や社会の一員としての自覚が芽生えつつある生徒のよさを生かす。

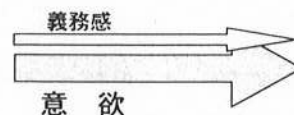
職場体験やボランティア活動をはじめ、地域社会にかかわる体験活動の中で生徒が見せる社会の一員としての自覚ある姿に授業の中で触れるなど積極的に生かしていくことで、社会参画への意欲を高めていくことができる。

- 地域協力者の話から、積極的に社会参画し、地域や他者とかわることの意義を考える。

民泊を受け入れたBさんの体験（「出会い・ふれあい・つながり・ひろがり」）を通して、積極的に社会参画し、地域や他者とかわることは、社会への貢献だけでなく、新たな自分を発見し、生きる喜びを感じることができる大切な機会であることに気づかせたい。



Bさん
(人材)



学習展開の配慮点

- 「国体」に関する写真等（歓迎・応援）を提示し、イメージをふくらませる。
- 自分たちの国体を含めたこれまでの体験で感じたことや考えたこととBさんの話を重ねて考えさせる。

生徒も国体への協力活動に取り組み、それ以外にも職場体験や地域の清掃活動などに取り組んでいることから、それらの活動の中で感じたことや考えたこと（状況によっては、教師がとらえた生徒の姿を提示する）などの中から、Bさんの思いと共通する部分を引き出していく。



その他

- * 体験活動後に意識調査を行い、授業展開を考えると効果的に意見を交流させることができる。
- * 板書とは別に、写真等をコンピュータ等で提示するとイメージ化しやすい。

3 協力することの大切さについて考えた事例

<事例1：小学校>

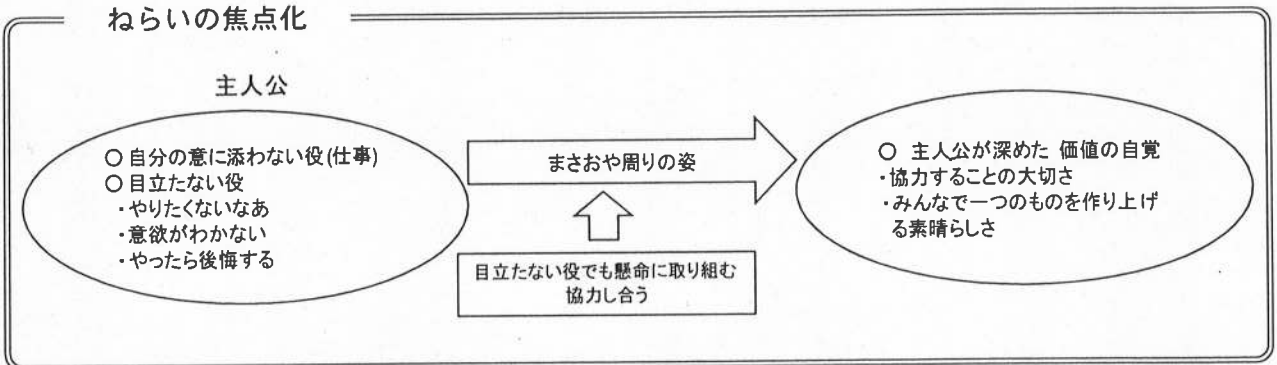
資料の概要

「うらしま太郎」の劇で、主人公のえりちゃんが、おとひめの役を希望しながらも友だちにその役をゆずる。いざ練習に入ると、きれいな服を着て練習するおとひめ役を見て、「やっぱりおとひめ役がよかったな」と後悔する。しかし、わかめ役でも一生懸命に練習するまさおの姿や思いに触れ、どんな役でもみんなと一っしょにしたら楽しくやれるということに気づき、「みんなでやって、すてきなげきになればいいな」という風に、前向きに取り組ようになる。



マンガによる自作資料

ねらいの焦点化



学習展開の配慮点

- 「楽しさ」をキーワードに、協力することについて考えさせる。
「えりちゃんは楽しくタイの役ができるか」と、課題を設定する。子どもたちの意見を〈自分の都合〉〈責任感から〉〈みんなで助け合って劇を作る楽しさから〉の3つの層に分類する。自分の都合から意見を言う子には「みんなやりたい役をやったらいいね」と問いかけ、それでは劇が成り立たないことに気づかせる。「みんながいないと劇ができないよ」と劇全体に視点をおく子には、「心の底からタイの役を楽しんでいるか」と問い、建前でなく本音を引き出したい。
- 協力することのよさを感じさせ、前向きな心を高める。
子どもたちの意識がみんなで劇を作ることに楽しさに向いてきたら「いやなことでもみんなと一っしょに楽しくできるか」と問い、主人公の気持ちと自分を重ねながら意見出す中で、協力して取り組みことに対する前向きな意欲の高まりを期待したい。

その他

- * 低・中学年ではロールプレインやペープサートなどを取り入れると、子どもの興味が高まり意欲が持続して価値の自覚が高まることが期待できる。

<事例2：中学校>

資料の概要

けがが原因で体育大会の学級練習に参加できなかった春香が、自分にできことを精一杯考える。そこで、かけ声をかけることを思いつき、みんなに声かけをする。そして、大会当日直前にけがが治り大会に参加するという話である。

学級みんなのために自分にできる役割を懸命に果たそうと努力している春香の思いに目することで、集団の中で自分が果たすべき役割と責任の大切さを意識して行動していこうとする意欲を高めることが期待できる資料である。

「わたしの体育大会」：未来を拓く 大分県教育委員会

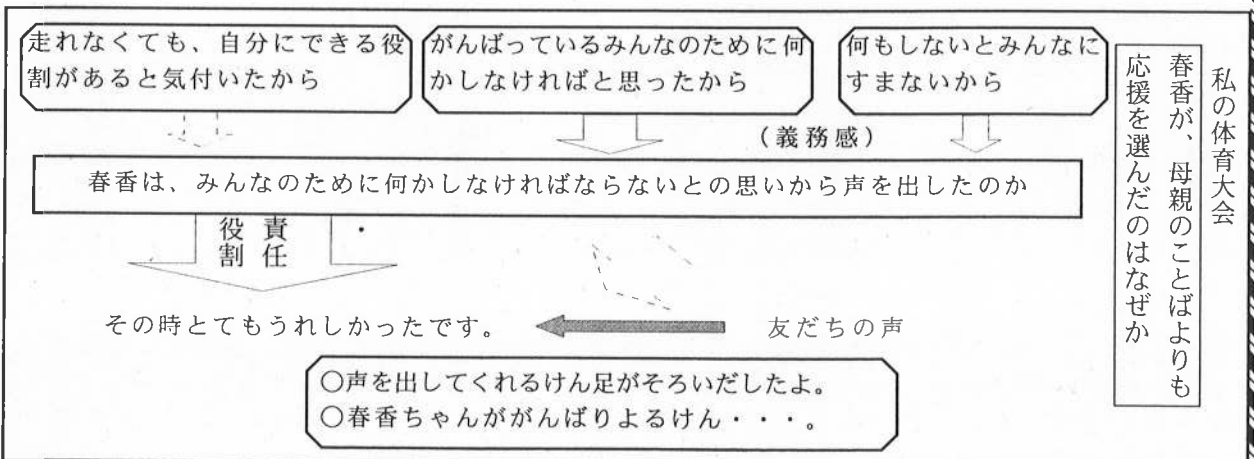
ねらいの焦点化

- 集団のために自分にできる役割を果たすことの大切さについて考えさせる。
春香の懸命に声を出す姿から、一人一人が集団に対する役割と責任を自覚し、お互いを大事にすることで、協力関係を作り上げていくことの大切さについて考えさせたい。
- 集団の一員としての役割と責任を果たしていこうとする意欲を高める。
部活動などの自分が所属する集団の中でこれから自分ができることを考えさせ、役割と責任を果たしていこうとする意欲を高めたい。

学習展開の配慮点

- 「義務感」と「役割・責任」の違いをわかりやすく板書に示す。

<板書例>



- 生徒のこれまでの経験を共感的に受け止める。
役割と責任を果たしていこうとする意欲を高めるために、生徒のこれまでの経験を共感的・肯定的に受け止めるように留意する。

その他

- * 資料が生徒作文であり実態と近いことも考えられるので、授業が生徒の実態の反省の場にならないように留意する必要がある。

4 自分たちの生活とのかかわりから法について考えた事例

<事例1：小学校>

資料の概要

- 久しぶりの登山でゴミの多さに驚き、憤りを感じた私が、「ひどいもんだなあ。帰りに空き缶を集めていくか。」「ぼくらだけそんなことをしても仕方ないよ。」「いやだと言っているけどどうにもならないのではないかな。ゴミを一つ持って帰れば、それだけゴミが減るわけだ。」という、ある親子の会話と空き缶でいっぱいになったリュックサックを背負って帰る後ろ姿をとおして、登山者としてのルールやマナーの大切さについて考えることができる資料である。

「ふくらんだリュックサック」：6年生の道徳 文溪堂

ねらいの焦点化

- ルールやマナーの意義について考える。
 - ・自分の日頃の行動を振り返りながら（共感的な受け止め）
 - ・親子はなぜゴミを拾ったのか、その背景を考えて（法の意義）
- ルールやマナーを大切にしていこうとする意欲を高める。
 - ・関連する教育活動とつないで（体験活動との関連、人材活用）
 - ・小さくとも、すばらしい行為を取り上げて

学習展開の配慮点

- 環境と自分とのかかわりを意識させる。

総合的な学習の時間で取り組んでいる地域の環境について触れながら資料を読ませる。
- 「ふくらんだリュックサック」の中身を考える。

資料名に注目させ、私が親子のふくらんだリュックサックの中に入っていると感じたものが、空き缶などのゴミだけでなく、自然を楽しむ登山者としてのルールを守り、できることから行動している生き方としてのすばらしさであることに気づくよう留意する。



- 意欲を高めるために人材を活用する。

終末で、地域の環境保全活動に取り組む方の話を聞き、今後の活動への意欲を高める。

その他

- * 高学年の発達段階を考えた時、単発的な扱いではなく、総合的な学習の時間や特別活動などを中心として、各教科とも関連させて指導していくとより効果的であると考えられる。

<事例2：中学校>

資料の概要

- 動物園の入園係をしている元さんは、ある日、入園時間を過ぎてやって来た幼い姉弟を保護者同伴という規則があることを知りながら入園させてしまう。その後、閉園時間を過ぎても帰ってこない姉弟を全職員で捜索するという事件に発展するが姉弟は無事保護される。後日、元さんのもとには二通の手紙が届けられる。一通は姉弟の母親からの感謝の手紙、もう一通は動物園からの解雇の手紙。はればれとした顔で身の回りの整理する元さんの姿をとおして、規則とは何かを考えることができる教材である。

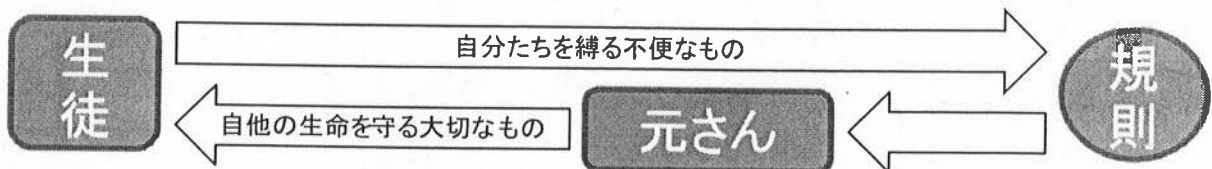
「二通の手紙」：あすを生きる 日本文教出版

ねらいの焦点化

- 規則やルールの意味について考えさせる。
 - ・自分周りにある規則やルールを振り返りながら（共感的な受け止め）
 - ・元さんのはればれとした顔の理由を考えて（規則の意味）
- 規則やルールを見直し、大切にしていこうとする意欲を高める。
 - ・生徒に身近な校則を話題にして（日常生活との関連）

学習展開の配慮点

- 生徒の身の回りにある規則やルールについて考える。
身の回りの規則やルールについて、「おかしい」「変えてほしい」と思っているものを理由とともに自由に出させ、本時のねらいへの意識化を図る。
- 元さんのはればれとした顔の意味を考える。
姉弟を捜索しているときの「祈るような思い」と、はればれとした顔で身の回りの整理をする姿の対比から、「規則を守ることは命を守ること」の大切さについて考えさせる。



- 校則を話題にして、その意味について考える。
校則について、それぞれの項目に含まれた意味について意見を出させながら、それらを守っていかうとする意欲を高めていく。

その他

- * 身近なテーマであるだけに、「規則を守ることは大切だ」という教師による押しつけにならないように、校則等に対する生徒の否定的な考えも大切な意見として受け入れるように留意する。

5 命の大切さについて考えた事例

<事例1：小学校>

資料の概要

喘息に苦しみ、絶望感の中にいた妹が、星野さんの作品や生き方に触れ、生きる希望を見出していく。命の大切さや家族へ思いが綴られた妹の手紙を通して、自分自身を見つめ直し、命の大切さについて考えることができる資料である。

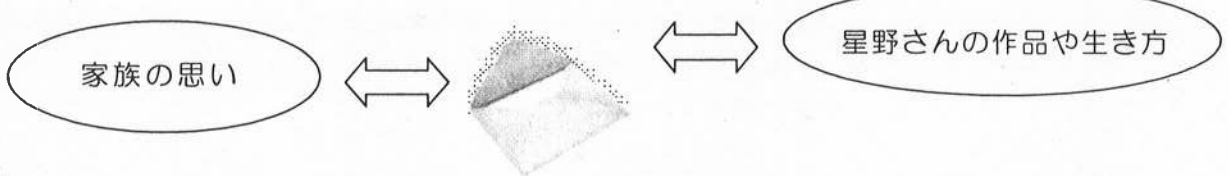
「妹の手紙」：新しいの道徳 光文書院

ねらいの焦点化

- 命の重さについて考える。
自分に直接関係ないこととして無関心な子どもたちにも関心を持たせるために、朝の会等で、気になるニュースや話題を積極的に取り上げる。
- 生きることの大切さをじっくりと考える。
周りの人たちの思いに触れることで、自分が今生きていることのすばらしさを感じさせる。
 - ・星野さんの作品や生き方に触れながら（学級文庫、星野さん作品コーナー）
 - ・親の思いにふれながら（保護者との連携）

学習展開の配慮点

- 命にかかわるニュースや話題と関連させる。
新聞記事やニュース等、最近の話題を取り上げながら、資料を読みませる。
- 妹の気持ちが絶望から希望に変化したわけを考える。
妹の考え方が変わったわけとして、〈星野さんの作品から感じること〉〈星野さんの生き方にふれたこと〉などが出たら、さらに、妹が星野さんの作品から何を学んだのかを探らせていく。また、妹の手紙の「生まれたことに感謝」「お父さんお母さんからもらったたった一つの命」などを手がかりに、家族の思いに気づいた妹の気持ちにも目を向けさせるよう留意する。



- 親から届いた手紙を紹介して
手紙から、自分は大切な存在であると感じ取らせ、今後の活動への意欲につなげる。

その他

- * 星野富弘さんの作品紹介等を掲示するなど、児童が命の大切さに触れることができる学級環境づくりを心がける。

<事例2：中学校>

資料の概要

ホームページへの書き込みがきっかけで、6年生の女儿が同級生によって殺害される事件が長崎で起きた。その事件の概要と、被害者の父の「お別れの会」でのあいさつ文等から、かけがえない命の大切さについて考えることのできる資料である。

とっておきの道徳 日本標準 他

ねらいの焦点化

○ 生徒の実態を考慮する。

- ・ 比較的健康に毎日が過ごせる場合が多いため自己の生命に対する有り難みを感じにくい。
- ・ 人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を動かされたりする経験も少ない。
- ・ インターネットやメールによる人間関係のこじれ等も増えている。

○ 父の手紙から、命の有限性や連続性について考えさせる。

加害者の親や被害者の親など、いろいろな角度から事件を見ることで、命を絶つことは単に自分自身の問題ではなく、自分とつながるたくさんの人を深い悲しみに突き落としてしまうことを知らせ、日常生活を振り返らせたい。

学習展開の配慮点

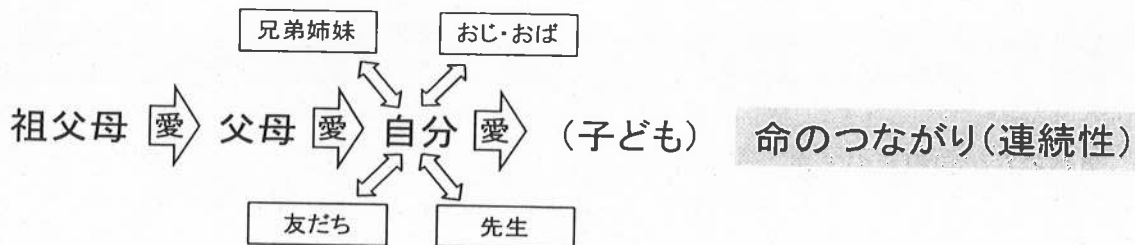
○ 「ありがとう」と「ごめんなさい」という言葉について考えさせる。

- ・ 「ありがとう」を送りたい大切な人の存在→その人がもしいなくなったら。
- ・ 「ごめんなさい」で済むことと済まないこと→後で取り返しがつかないこと。

という発問で長崎の事件につなげていくことで、資料を身近なものとしてとらえさせ、考えを深めさせる。

○ ひとつの命がたくさんの人の人生とつながっていることに気づかせる。

加害者・被害者双方を取り巻く人々の気持ちに思いを馳せること、特に被害者の父のあいさつ文<被害者の娘は亡くなった妻が最期まで慈しみ育てた子であったことや、父親の心の支えだったこと>により、ひとつの命がたくさんの人の人生とつながっていることに気づかせ、自分の命のつながりについても考えさせる。



その他

- * 書かせた感想は、後日通信などで紹介するなど、授業で交流できなかった友だちの思いを知らせ、互いの思いを共有できるように配慮することが大切である。

6 資料提示を工夫した事例

<事例1>

資料の概要

みそさざいはやまがらの誕生日によばれているのに、他の小鳥と同じように明るくきれいなうぐいすの音楽会に行ってしまう。しかし、やまがらの思いに気づき、そっと抜け出しやまがらの家に行き一緒に誕生日を祝った。

思いやりの大切さについて考えることができる教材である。

「二わのことり」：小学校道徳 東京書籍

具体的な資料提示の工夫

- 1年生の子どもたちに場面背景や登場人物の関係を捉えやすくするために、「つかむ」段階で視覚的効果を使う。
 - ・ 拡大絵の活用
資料を読みながら、黒板に拡大絵を位置づけていくことで、場面背景や登場人物相互の関係、主人公であるみそさざいの迷いをとらえやすくする。
 - ・ ペープサートの活用
ペープサートを使いながら会話部分を子どもに語らせることで、資料に浸らせる。
 - ・ 吹き出しの活用
子どもの考えた主人公等の気持ちを吹き出しに書いて黒板に位置づける。

<事例2>

資料の概要

自分の一時的な欲望を満たしたいがために、わがままを通そうとする自分勝手な少年の姿が前半に示されている。後半部分は、少年のために貝を探す叔父と、その様子を見つめ自己の言動の過ちに気づいていく少年の姿が描かれている。最後の言葉の中に、過ちを反省した少年の素直な気持ちが表れている。

「トムトムが見たものは」：文部省道徳教育推進指導資料

具体的な資料提示の工夫

- ねらいとする内容項目に目を向けさせるために、資料との出会いのタイミングを工夫する。
 - ・ 日常生活の中でのわがまま（ねらいとする内容項目とのかかわり）についての経験を出し合う。
 - ・ 子どもたちそれぞれにわがままな経験があり、自分だけが特別にあることではないことを気づいてきたら資料を提示する。



主人公の言動と自分の日常を重ねさせる効果

<事例3>

資料の概要

元サッカー日本代表、城彰二はJ1ビッセル神戸を解雇され、その後どこからも誘いがなく苦しい日々を送っていた。キャンプ前日にJ2横浜FCから誘いがあり入団した。チームの役に立ちたいと思いながらも自分の力が出せず、チームも成績が伸びなかった。いらだつ城は、チームメイトに不満をぶつけた。そんな城に対して妻は、「あなたはJ2の城よ、日本代表やJ1の城じゃないのよ」と声をかける。この言葉で自分の傲慢さに気づいた城は、「チームメイトの声に耳をかたむける、お互いにいいところを認め合う」ことをこころがけるようになる。

新聞記事

具体的な資料提示の工夫

- PCやプロジェクターを効果的に活用し、資料（登場人物）に対する理解を図る。
 - ・ 提示した新聞記事のキーワードにマークを入れるなど、ポイントの焦点化を図ることによって、生徒が共通の土台を基に考えることができる。
 - ・ 城さんのサッカー選手としての経歴、現役時代の写真や試合の映像等を効果的に提示することにより、資料や主人公に対する理解を深めることができる。
 - ・ 資料提示や理解を短時間で行うことにより、考え、話し合う時間を確保することができる。

<事例4>

資料の概要

資料は、地域協力者Aさん（建築士）の生徒に向けた語りである。Aさんの仕事での最大の喜びはお客さんの笑顔であり、「建築を通して社会の進歩に貢献する」ことをめざして日々仕事に取り組んでいる。Aさんは、この目的を実現させていくために積極的に見識を広め、感性を磨く努力（勉強）を続けている。

地域協力者Iさんの話

具体的な資料提示の工夫

- 地域協力者の話を資料として使う。
 - ・ 中学生になると、初対面の方の話をしっかりと理解し、その内容と自分の思いや生き方を照らし合わせて考える力がついてくる。
 - ・ そこで、協力者に「今も行っている勉強」について話していただき、「なぜ、大人になった今も勉強を続けるのか」を考えさせることで、勉強することの意味について考えさせる。



7 体験活動と関連させた事例

<事例1：小学校>

資料の概要

本資料は、「鳥と仲よくなりたい。」と思い、餌付けをしたことが本当は鳥たちのためにならないことに気づき、餌をあげるのをがまんするというお話である。

最初は、「かわいい鳥たちとなかよくなりたい。」と、自分の都合でえさをあげる主人公であるが、お母さんが言った「本当にサリーたちのことを考えて、かわいがっていると言えるのかしら。」という言葉に、もう一度自分の行為の是非を考え直す。自然や動植物を大切に、それらと共存していくことの大切さに目が向くことが期待できる資料である。

「ごめんね、サリー」：小学校道徳 東京書籍

体験活動の概要

- 社会科や総合的な学習の時間で地域の干潟（三百間の浜）での環境に関する体験
 - ・ 干潟の漂着ゴミ調査（地域人材の協力）
 - ・ 干潟クリーンアップ活動への参加
 - ・ 干潟遊び（干潟の生き物見つけ）
 - ・ 干潟の海の幸を味わう会の実施



体験活動と関連させたねらい

- これまでの干潟（三百間の浜）へかかわりを振り返らせる。

生き物探しの活動で、自分が好きなだけ生き物を採って持ち帰ったり、世話が中途半端になったりする児童や、生き物や自然に対するマナーを聞いた後でも気持ちを押しさえきれず、採取した生き物を黙って持ち帰る児童もいる。そのような状況の中で、道徳授業を位置づけることにより、自分たちのこれまでの活動を重ねながら、自然や動植物を大切に、日常生活でもより積極的にかかわろうとする意欲が高まることをねらう。

学習展開の配慮点

- 主人公の行為に対する自分の考えの根拠を引き出す。

「仲良くなりたいたのにえさをあげたい気持ちをがまんしないといけないのか」と問いかけ、これまでの体験と重ねながら自分の考えを語らせることで、自分の都合ではなくサリー（自然）のことを考えていくことが大切であることに気づかせていく。
- 体験活動での協力者の話等から、資料と活動をつなぎ、活動への意欲を高める。

「ひろげる」段階では、これまでの活動の中でお世話になった方に自然と人とのかかわり方の難しさ等について話していただいたり、「未来の干潟（三百間の浜）」という題で自分の思いを作文に書かせたりすることで、資料と自分たちの活動をつなぎ、これからの活動への意欲を高めていくようにする。

その他

- * 活動への振り返りは児童が自らすることであり、教師側から押しつけないように留意する。

＜事例 2：中学校＞

資料の概要

全国至る所に設置されている点字ブロック。視覚障がいのある方々が安全に歩くための道しるべになっている。しかし、点字ブロックの発明者や、普及への道のりは案外知られていない。点字ブロックを発明者は三宅精一という日本人である。「友情」から始まった行為であるが、彼は私財を投げ打ち、身を削る思いで、点字ブロックの開発と普及に取り組む。三宅精一の生涯を通じて、世のため人のためになる生き方を考えさせる。



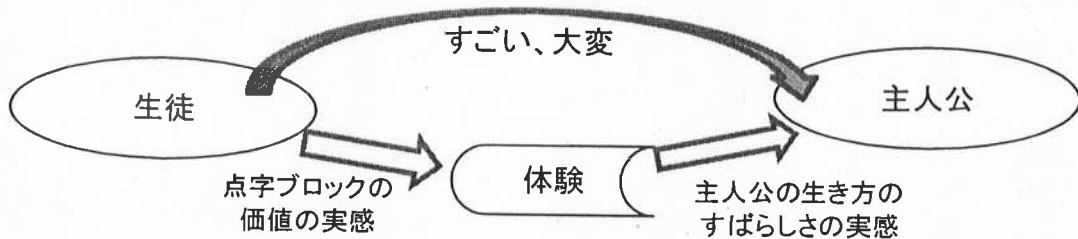
「点字ブロック誕生秘話」：インターネット情報からの自作

体験活動の概要

- アイマスク体験（福祉に関する総合的な学習の時間 1～2 時間を事前に実施）
 - ・ 体育館をペアで歩く（一人は誘導役）→点字ブロックの上を同じようにペアで歩く→点字ブロックの上に障害物を置いてペアで歩くという順序で行う。
 - ・ 安全の確保等ができれば、実際に公道で体験することが望ましい。

体験活動と関連させたねらい

- アイマスク体験を行うことにより、視覚障がい者にとっての点字ブロックの価値を実感させる。
 - ・ 点字ブロックの開発と普及に生涯をかけた主人公の生き方をより深く理解できるように、アイマスク体験を取り入れ、点字ブロックの効果について実感させる。



学習展開の配慮点

- アイマスク体験をとおして感じたことを出し合わせて、資料を範読する。

「思った以上に怖かった」「点字ブロックがあると、かなり安心して歩けた」「補助の人がちゃんとやってくれたので、大丈夫だった。一人だと歩けないかも」等の体験活動で感じたこと等を出し合させた後に、資料を配布し範読することで、生徒が資料の内容にに入りやすいようにする。
- 視覚障害者の話を聞く。

健常者が実際に障がい者の立場で体験することの必要性や、視覚障がい者にとって点字ブロックがどれだけ生活の範囲を広げているのか等を具体的な経験をふまえながら話してもらうことにより、主人公の努力が多くの人々の生活に生かされていることを知り、自分たちも他者や社会のために何かしていこうという意欲を高める。

その他

- * 道徳の時間のために、事前に 1 時間の体験を行うことは望ましくないため、総合的な学習の時間等と関連させるように配慮する。道徳の時間の中で体験させる場合は、10～15分程度にとどめるよう留意する。

8 人材を活用した事例

<事例1：小学校>

資料の概要

双葉山は、15歳で期待されて力士になり勝ち続けたが、途中大変なスランプに陥りすっかり自信をなくしてしまう。しかし、嵐の時の父の声を思い出し、それを支えに再び一心にけいこを続け、後に69連勝という大記録を作り日本一の大横綱になった。

「もっとけいこを」：新しい道徳 光文書院 大分県版資料

人材の特徴

- 毎年夏休みにボランティアで児童に水泳を教えており、身近な存在である。
- 子どもの頃は水泳が得意というわけではなく、自分が溺れた経験から一念発起し上手になりたいという願いをもち、小学校から大学まで水泳を続け、ついには国体選手となった。
- 現在は、ボランティアで水泳を教えることで、人とのふれ合いを楽しみ、地域に貢献したいという願いをもっている。

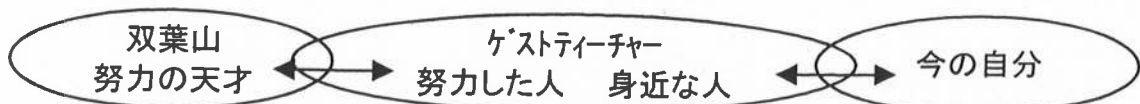
人材を活用したねらい

- 双葉山と子どもたちをつなぐ存在として
双葉山は子どもたちにとって「すごい」との印象を与える人ではあるが、子どもたちが自身と重ねて考えるには、「すごいけれどわたしには無理」という思いをもたせてしまうことも考えられる。したがって、子どもたちと双葉山をつなぐ手立てとして、子どもたちに身近な人材の活用が有効となるのである。
- 子どもの心を刺激する存在として
自身のことだけでなく、水泳の練習での学級の子どものがんばりに触れながら、子どもたちにも「努力する力がある」ということを話していただくことで、「目標を持って努力してみよう」という気持ちを高めたいと願った。

学習展開の配慮点

- 子どもたちの姿を共感的に受け止める。
主題（主人公の生き方）にかかわる子どもたちの経験を語らせる。その際、子どもたちが主人公と自分とのギャップから自己を否定する思いをもつことのないように、共感的に受け止めるように留意する。
- ゲストティーチャーに子どもたちの前向きな姿を語ってもらう。
努力を続けることは難しいが、人には何か続けられることがあり、その力があることを、自身の経験や水泳指導の中でとらえた子どもの具体的な姿をもとに語ってもらうことで、「自分にも努力できる力がある」等の自己肯定感や「頑張ってみよう」等の意欲を高めるように留意する。

<主人公と子どもをつなぐ人材の活用イメージ>



<事例2：中学校>

資料の概要

東京ディズニーランドは「お客様に夢と希望を与える」を最も大切にしており、そのために力を入れている活動が「掃除」である。朝から晩まで掃除係が300人ずつ15分交替で毎日掃除をする。「ナイトカストーディアル」と呼ばれる「夜の掃除係」がいて、毎日、夜中の12時から朝の7時まで、広い園内をブラシを使って「水洗い」したり、トイレ掃除をしている。

東京ディズニーランドホームページ

人材の特徴

- 特別養護老人ホームで事務の仕事をしており、仕事をミスのないように行うことだけではなく、お年寄りたちに元気を送ることを心がけ、お年寄りに毎日ができる限り楽しく過ごしてもらいたいと願っている。
- そのため、自分のできることとして、元気のよい爽やかなあいさつや笑顔での声かけ、そして、お年寄りとの会話のきっかけとなる派手なネクタイなどの服装の工夫である。

人材を活用したねらい

- 職業（仕事）の意義を見つめる存在として
職業（仕事）について、表面的なことや派手なことに目を向けがちな生徒に、目には見えないけれども、その基盤となる大切なことに気づかせてくれる存在として、生徒にとって「普通の人」である人材の活用が有効である。
- 職場体験への意欲を高める存在として
自分自身の体験をふまえながら、仕事へのやりがいや愛着等を伝えてもらうことにより、職場体験へ不安を抱く生徒に、「やってみよう」という思いを高めたいと願った。

学習展開の配慮点

- 「目立たない日常的なことが大切」という共通点に目を向けさせる。
ディズニーランドが最も大切にしているもの（「お客様に夢と希望を与えること」と、それを実現するために力を入れている「掃除」について、「なぜ掃除をすることが夢と希望を与えることになるのか」との課題と関連させ、目立たないけれども「あいさつ、笑顔での声かけ、服装」などにこだわりを持って仕事をする話を聞かせることで、両者の共通点（人間としての生き方）について考えさせる。
- 「当たり前のことが大切なこと」について語ってもらう。

特別なことや難しいことができることもすばらしいことだが、誰もができる当たり前のことをしっかりとできることが、「信頼」という仕事をする上でもっとも大切なものであり、職場体験でも生かして頑張りたいという思いを語ってもらう。



その他

- 人材を活用する場合、「人材の方」に任せすぎると授業者が設定したねらいに到達できないことが多いし、逆の場合は「人材の方」の魅力を引き出せないことが多い。この溝をできるだけ埋めるには、十分な打ち合わせが欠かせない。

9 心のノートを活用した事例

<事例1：小学校低学年>

資料の概要

勇気とは、自分自身の弱い心にかち、自分がよいと思ったことは実現しようとする力である。よいと思うことをする時や悪いと思うことをやめようとする時などに、どういう行動をとればよいかを日常生活にありがちな場面を通して共感的に考えることができる内容である。

「ゆうきのとびら」：新しい道徳 光文書院

心のノートの活用ページ及び概要

よいことと悪いことの区別はついているか。よいことは進んで行っているか。挿絵の中のうさぎの立場で自分の生活を見直し、勇気の力を高めることができる。(p22~23)

心のノートを活用した学習展開の工夫

○ 疑似体験で生活の見通しを

本ページでは、日々の生活にありそうな勇気を必要とする場面が迷路形式で描かれている。挿絵の動物に自分を置き換えながら、勇気の行動を疑似体験することができる。

○ アサーティブなコミュニケーションを

勇気を必要とする場面に出会ったときどのように声かけをしていくか。声をかけるほうもかけられるほうも「みんなが笑顔になる」ためには、相手の気持ちを考えた言い方や、なぜ悪いのか理由を伝え互いが納得した言葉かけが大事であることに気づかせていく。

<事例2：小学校高学年>

資料の概要

オリンピック金メダリストの北島康介選手の日々の努力の様子や、夢をあきらめずにいつも挑戦する気持ちを持ち続けてきた北島選手の生き方を知るとともに、その努力について考えることができる内容となっている。

「北島康介 世界最速をめざすトップアスリート」：旺文社

心のノートの活用ページ及び概要

「目標に向かって生きる」ことをテーマに、夢や目標を実現させるためには、どのような努力、どのように生き方が必要なのか考え、自分を見つめ直すことができる。(p16~19)

心のノートを活用した学習展開の工夫

○ 目標に向かって生きることの大切さを考えるきっかけとして

導入の部分で、イチロー選手の他にも北島選手のように4年後のオリンピックで世界新記録を出すことを目標にして自分の体調を整えていったこと等紹介することで、自分の現在の夢や目標について考えさせ、それに向かって自分は今どのようなことをがんばっているのか、自分の行動や自分自身を見つめ直させる。また、社会体育で野球や水泳をしている子に練習しているときの様子や気持ちを語らせることで、自分の夢を実現させるためには、日々の絶え間ない努力が必要であることに共感させていく。

<事例3：中学校>

資料の概要

合唱コンクールを前にした学級。主人公は、パートリーダーを務めているが、積極的にこなせず責任を果たせずにいた。そんな中、他のパートリーダーから主人公のやる気のない態度を指摘される。主人公は反発し、指摘されたことに理不尽さを感じる。そんな中、昨年の担任から一枚の絵はがきをもらう。絵はがきには、南米のある国の現状と日本との違いが記されていた。その絵はがきを読み終えると、主人公の心が揺れ動く。ある漫画に描かれていた『TeamにI（自分）という文字（スペル）はない…』というフレーズの意味を考え、自分自身を振り返り、責任の意味を理解するようになっていく。

「一枚の絵はがき」：自作資料集No.1 明治図書

心のノートの概要及び活用ページ

集団、そして一人一人が輝くために自分はどうしてきたのか、これからどうあるべきなのか等について、これまでの自分を見つめながら考えることができる。(p104~107)

心のノートを活用したねらい

- 自分自身を今一度振り返り、これからの自分を思い描かせる手立てとして
生徒は、体育祭等の活動をとおして成長しているが、まだリーダーに任せきりになっていたり、いまひとつ意欲的な姿勢が見られない状況もある。3年生最後の行事である文化祭に向けて、集団の質の向上とその一員として自ら主体的にかかわるには何が必要なのかをもう一度見つめ直すために活用を試みる。

心のノートを活用した学習展開の工夫

- 「出会う」段階での活用
集団の一員として必要なことは何か、また、集団生活の向上に必要なものは何かについて、p82を読んで、自分なりの考えを自由に書かせ、簡単に出し合わせた後に資料での学習に入る。
- 「生かす」段階での活用
主人公の生き方について考える中で、これまでの自分を見つめている生徒に、p85に記述させることで、これからの前向きな生き方を意識させる。その際、記述した内容の交流については、自分を見つめることを第一として考え、生徒の自主的な意志をふまえるように留意する必要がある。

その他

- * p106、107については、別の道徳の時間に活用したり学級活動等で活用したりするなど、状況に応じた活用に配慮する。

10 話し合い活動の充実を図った事例

<事例1：小学校1年>

資料の概要

先生が「どんなことでもいいですから、1日10分、毎日続けてごらん下さい。」と、みんなに言ったので、みどりさんは、毎日10分ずつ字の練習をすることに決めた。何日か続けるが、少しも変わらないので何度かやめたくなる。考え直して練習を続け二ヶ月ぐらいたったある日、先生が「みどりさんは、この頃ずいぶん字が上手になりましたね。」とノートに書いてくれたという話である。

「一にち十ぶん」：あたらしい道徳 光文書院

具体的な話し合い活動の工夫

- 資料と出会い、主人公の行為に驚きを持たせて中心課題を生むための「つかむ」段階での意見の出し合い

- ・「何度かやめたくなった時、みどりさんはどんな気持ちだっただろう。」と問いかけ、「私下手なんだ、もうやめよう」「みんなのように上手になりたい」等の子どもたちがとらえた主人公の心情を、心情図や天秤ばかりなどにより視覚的にとらえやすく工夫することで、自分の考えを心情図等に置き換えながら出しやすくする。
- ・「ぼくだったら・・・」「わたしだったら・・・」と発言を求め、主人公の心が「やめよう」に傾きながらも続けたことに驚きを持たせ、「どんな気持ちがあったから続けられたのか」という中心課題に結びつける。

<事例2：小学校4年>

資料の概要

主人公ひろ子は、転校していった仲良しの正子が出した普通のはがきより大きめのため、料金不足のお知らせがある絵はがきを受け取る、料金不足だったことを教えてあげた方がいいという兄とお礼だけ言っておいた方がいいという母の考えを聞き、迷った末、（正子さん、きっとわかってくれる）と返事の最後に120円切手を貼らなければならないことを書き足しはじめたという話である。

「絵はがきと切手」：4年生のどうとく 文溪堂

具体的な話し合い活動の工夫

- 「意欲を高める」段階でのアサーショントレーニングの手法を用いたロールプレイ
 - ・手紙に書き足すという場面だが相手に直接話すという場面設定にし、正子への「忠告」の場面をロールプレイで表現させる。
 - ・相手のためになる言い方をグループで話し合うことにより、相手が間違っているとき、相手のためになる言葉を選んで注意することの大切さを感じさせる。
- 例：手紙のお礼、笑顔で、優しい声で、肩に手を置きながら、同じ立場に立ちながら等

<事例3：小学校6年>

資料の概要

夏休み作品展で森川君がつくった本立てが上手にできていることから、2、3日後「あれは、本当は森川君のお父さんが作ったんだって。」といううわさが広がる。主人公の「ぼく」は、めんどろなので「それはちがう」といえなかった。3学期卒業記念のオルゴール制作でも森川君の作品はすばらしく、また噂されはじめ、ついには仲間はずれにされるようになってしまう。そんなある日、いつもはおとなしい順子さんが森川君は器用だということや噂で人を判断してはいけないということをみんなの前で発言する。それを聞いて「ぼく」も発言しようと決心する。

「森川君のうわさ」：新しい道徳 光文書院

具体的な話し合い活動の工夫

- 社会科の学習（関東大震災の後の朝鮮人襲撃事件）と関連させて、差別や偏見をなくするためには真実を見つめることが大切であることを考えるための話し合い
 - ・ 社会科で学習した大震災の後の朝鮮人襲撃事件と資料との共通点や相違点について意見を出し合う。
 - ・ 順子さん（うわさに惑わされず、森川君の本当の姿を見ている）をもとに、「どうすれば同じような過ちをしないか」という視点から班で話し合い、真実を見つめることの大切さについて考えさせる。

<事例4：中学校>

資料の概要

『牛肉の偽装や賞味期限の改ざん』などのニュースを見て、父は「全部とは言わないが、多くの会社はバレないようにうまくやっているものだ」と言ったことに対して、母は「バレなければ何をやってもいいの？」と反論する。ぼくは母の意見に賛成したものの、実際は『バレなければいいと買い食いしたり、ごみを捨てたりしたこと』を思い出す。

父と母の考え方に葛藤しているぼくの心情に目を向けさせることにより、法や決まりを守ることの大切さについて考えることができる資料である。

生徒と共に語り、共に考える中学校道徳『自作資料集』：明治図書

具体的な話し合い活動の工夫

- 少人数で話し合うことで、生徒の本音を引き出す。
 - ・ まず、2～4人程度の少人数グループで「自分は登場人物の誰に近いか」という視点で話し合いをもつことにより、父親の『損得』を優先する考え方に共感した意見と母親の『正義』を優先する考え方に共感した意見を交流させる。
 - ・ その際、『迷惑をかけないから』『自分だけだからいいだろう』などの理由から、きまりを守らない方向に流された経験を互いに出し合うよう働きかけ、それぞれに人間としての弱さがあることを共感的に受け止める。
 - ・ ルールを守らない結果、どんなことが起こるのかを予想させる。

Ⅲ 新学習指導要領を理解するための5つのポイント

- 1 校長の方針の明確化と推進体制の構築
- 2 道徳教育推進教師の役割
- 3 学校の特色や子どもの発達の段階を踏まえた3つの「重点」
- 4 望ましい自尊感情を育てるために
- 5 子どものよさに目を向けた児童生徒理解

1 校長の方針の明確化と推進体制の構築

(1) 道德教育の基本的な方針を校長が明確に示すこと

これまでの学習指導要領では「校長をはじめ全教師が協力して」という表現が、今回の改訂で「校長の方針の下に」という表現に改められている。

校長は、船でいえば船長にあたる。その船長が、行き先を示さなければ船は迷走してしまう。したがって、校長は道德教育の基本的な方針を全教職員に対して明示することが求められる。

また、家庭や地域と連携した道德教育を進めるために保護者や地域住民に対しても明示するとともに、児童生徒に対する発信も重要となる。

① 教職員へ

まず、学校としてどこに重点を置いた道德教育を進めていくのかを教職員に明確に示す必要がある。これが示されなければ、学校が組織として道德教育推進のベクトルを同じ方向に向けて取り組むことはできない。

② 児童生徒へ

児童生徒への示し方には工夫が求められる。全校集会等の機会に講話として話したり、校内に道德コーナーを設けて掲示したり、スローガンのように大きな掲示をして意識化を図るなどが考えられる。

③ 家庭や地域へ

学校からの情報を積極的に発信する必要がある。ある学校では、「道德通信」として校長自らが学校として取り組む重点や具体的な取り組み状況、児童生徒の姿等を発信している。また、ある中学校では、学校の入り口に心のノートの一文を大きく掲載し、生徒だけでなく保護者や地域の方々にも思いを共有してもらえるような工夫をしている。



(2) 道德教育推進教師を中心とした指導體制を充実すること

道德教育推進教師は、船でいえば航海士に当たる。示された方向、進路に向かい、安全な航海（充実した道德教育）のための鍵を握っている。

しかし、道德教育推進教師一人で道德教育は推進できない。したがって、各学年、教科等や生徒指導等の担当者に関連を図った指導體制を構築し、すべての教師がそれぞれの持ち味を十分に発揮しながら取り組む必要がある。

このような指導體制を構築し、円滑に機能させていくためには、校長のしっかりとしたリーダーシップや道德教育推進教師に対するバックアップが必要となる。

2 道徳教育推進教師の役割

(1) 道徳教育推進教師の主な役割

学習指導要領解説「道徳」では、道徳教育推進教師の役割としてア～クの8点が例示されている。

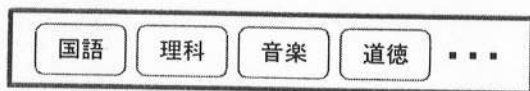
- ア 道徳教育の指導計画の作成に関すること
- イ 全教育活動における道徳教育の推進、充実に関すること
- ウ 道徳の時間の充実と指導体制に関すること
- エ 道徳用教材の整備・充実・活用に関すること
- オ 道徳教育の情報提供や情報交換に関すること
- カ 授業の公開など家庭や地域社会との連携に関すること
- キ 道徳教育の研修の充実に関すること
- ク 道徳教育における評価に関することなど

この例示からもわかるように、学校全体で取り組む道徳教育をコーディネートすることが大きな役割であり、特に、ア～ウの3点についてが、最も重要であると考えられる。

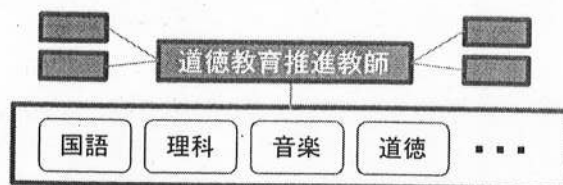
(2) これまでの「道徳主任」等との違い

これまでも、各学校では「道徳主任」「道徳推進担当」等の名称で校務分掌に位置づけていたが、道徳教育推進教師となったことで大きな違いが出てくるわけではない。

重要なことは、位置づけるだけで十分に機能していない状況を改善することである。学校自己評価が義務づけられ、学校関係者評価の実施が求められている状況等もふまえれば、学校内だけでなく、外部に対しても「道徳教育にどのような体制でどのような場で、どのような方法で、」取り組み、「どのような成果」を上げているのかについて、学校としてしっかりと示し、説明していくことが求められる。そのためにも、道徳教育全体を俯瞰しコーディネートする道徳教育推進教師が大切なのである。



これだと、道徳の時間の担当ですね。



こんな感じになるのかな。



道徳教育推進教師、研究主任、生徒指導主任・・・
わたしの責任で人選しなければ！

3 学校の特色や子どもの発達の段階をふまえた3つの「重点」

(1) 発達の特性に応じた内容構成の重点化

内容構成とは、道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を

- 1 主として自分自身に関すること
- 2 主として他の人とのかかわりに関すること
- 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること
- 4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

の四つの視点と

- ・ 最初の段階から継続的、発展的に取り上げられるもの
- ・ 学年段階が上がるにつれて新たに加えられるもの
- ・ 学年段階が上がるにつれて統合・分化されていくもの

などの観点から整理・構成したもので、最も指導の適時性のある内容項目を精選し、重点的に示したものである。

(2) 指導内容の重点化における配慮と工夫

新学習指導要領では、各学年を通じて重点化を図る指導内容と、低・中・高学年の児童の発達の段階や特性を踏まえて重点化を図る指導内容が次のように示されている。

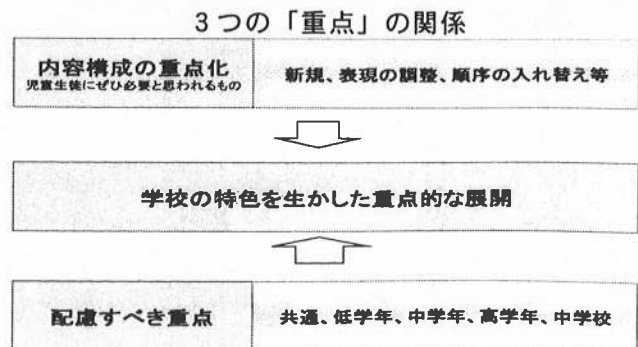
- <各学年を通じて指導内容の重点化に配慮する項目>
- 自立心や自律性、自他の生命を尊重する心
- <低学年>
- あいさつなどの基本的な生活習慣や社会生活上のきまり
 - 善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないこと
- <中学年>
- 集団や社会のきまりを守り、身近な人々と協力し助け合う態度
- <高学年>
- 法やきまりの意義を理解すること
 - 相手の立場を理解し、支え合う態度を身に付けること
 - 集団における役割と責任を果たすこと
- <中学校>
- 規律ある生活、法やきまりの意義、主体的な社会参画

これらの内容は、社会的な要請や今日的課題を踏まえたものであり、道徳教育全体計画等を作成する場合には、十分に配慮する必要がある。

(3) 各学校における重点的指導の工夫

各学校、学年段階で重点化された内容項目の指導においては、学校の教育活動全体で行う道徳教育及び道徳の時間を十分に関連させながら、多様な指導を工夫することにより実施することが大切である。

なお、どの内容を重点的に指導するのかについては、各学校において児童生徒や学校の実態を踏まえて工夫することになるが、その際には、(2)に示された内容項目について特に配慮することが求められる。



4 望ましい自尊感情を育てるために

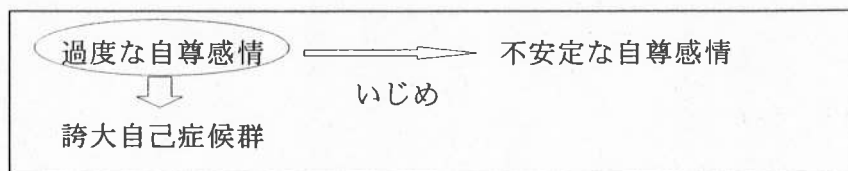
(1) 子どもたちの自尊感情の実態

現代の子どもたちの自尊感情は2極化しているといわれている。

一つは、過度な自尊感情であり、もう一つが不安定な自尊感情である。過度な自尊感情は、自己を過大評価し、他者より優位な立場に置こうとする。逆に、不安定な自尊感情は、自分に自信が持てず、他者より劣っていると感じている。

「いじめ」は、このような両極の子どもたちが共に生活する学校の中で、下の図のように過度な自尊感情をもつ子どもの側から不安定な自尊感情の子どもの側へと起こっていることが多いと考えられる。

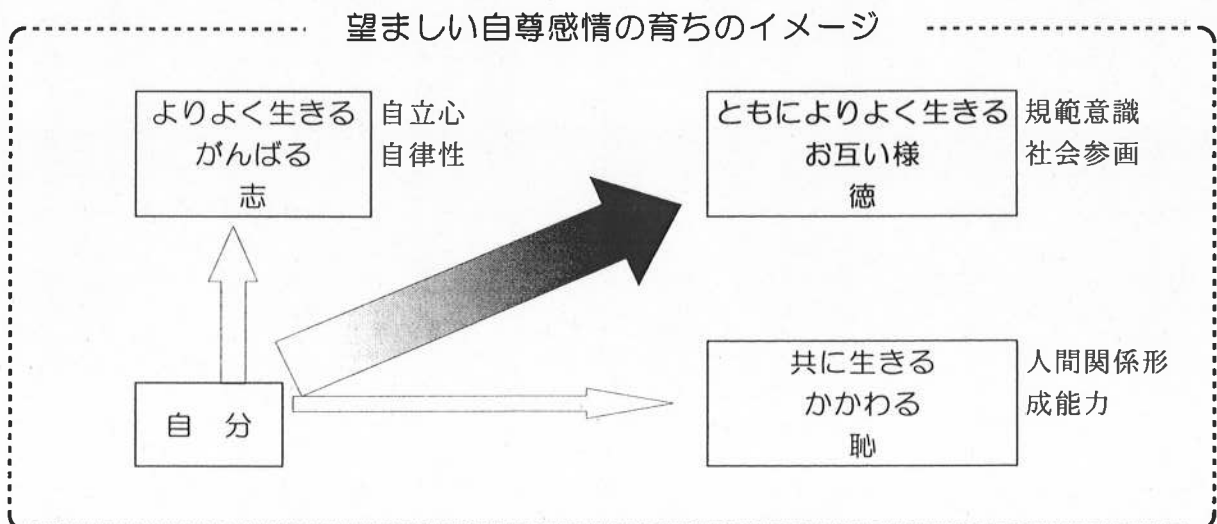
インターネット上での不適切な書き込みなどもこの構図の中で起こっているのではないだろうか。



(2) 望ましい自尊感情を育てるために

上記のような状況が起こる原因は、子どもたちの他者とのかかわりが不足しているからであると考えられる。また、よりよく生きようとする自立心や自律性が十分に育っていないことも起因している。

道徳では、「共にによりよく生きる」という言葉がよく使われるが、これが、望ましい自尊感情である。共に生きるためには、人とかかわる力を育む必要があり、よりよく生きるためには自立心や自律性を育むことが重要となる。その両者がバランスよくはぐくまれてこそ、共にによりよく生きるための規範意識や社会参画力などの道徳性が伸びていくのである。



5 子どものよさに目を向けた児童生徒理解

次の2つの文は、道徳の指導案に書かれた児童生徒観の例である。

<例1>

本学級の子どもたちは、全体的に明るく、・・・ように感じる。

しかし、①それが行動になかなか伴っていかなかったり、長続きしなかったり、実際にどう行動したらいいのかがよくわかっていなかったりといった現状もある。けじめのなさや自己中心的な言動、周りへの気づかいのなさや相手を傷つける言動がしばしばあるのは残念であり、学級の大きな課題となっている。

<例2>

本学級の生徒は、全体的に明るく、・・・を（学級活動や生徒会活動等の場における～な姿の中に）感じることが多い。

生徒は、・・・ときには、すばらしい力を発揮することができる。しかし、その場面はまだ限られており、生活全体へは広がっていない。これは、②生徒が意識する課題や目標、役割が自ら設定したものでなく、教師側からの働きかけで与えられたものになっていることや、③生徒が自らの意志で取り組み、失敗や躓きを乗り越えて大きな達成感を実感する場面を十分に設定することができていなかったこと、④生徒が憧れ、自らの生き方のモデルとしたいような人たちの姿に触れる機会を与えることができていないことなどが要因ではないかと考えられる。

<例1>では、①の部分で「行動が伴わない、長続きしない、どう行動したらよいか分からない、けじめがない、自己中心的、周りへの気遣いがない、相手を傷つける言動がある」などの、子どもに対する教師の見方が記述されている。しかし、記述された実態は否定的なものばかりで、実態に対するこれまでの指導の在り方に対する分析や教師の責任については一言も触れられていない。

一方、<例2>は、<例1>の問題点を踏まえて修正したものである。道徳教育の基盤である共感的児童生徒理解のスタンスがしっかりしていれば、それを指導案に具現化できる。

また、②～④では、これまでの教師自身の指導を分析している。このような分析がなされている指導案であれば、他の教科等における指導の手立て（②、③）や道徳の時間における指導の手立て（④）を指導観に明確に示すことができる。

いずれにしても、教師が子どもたちの実態に対する責任をしっかりとつことは不可欠である。



「記述にあたっては、児童（生徒）の肯定的な面やそれをさらに伸ばしていこうとする観点から積極的なとらえ方を心がけるようにする。」 学習指導要領解説：道徳編

子ども（教師）が感動する資料情報

「ユウキ」（「道徳と特別活動」2006.6月号：文溪堂）

難病と闘ったユウキと仲間たちの友情の物語で、小学校高学年から中学生に薦めたい資料である。（「ユウキ」（ポプラ社：単行本）あり）

新ちゃんの流しびな（加藤一雄）

生命の大切さ、すばらしさを感じさせることができる。乳幼児との交流体験などに関連させると有効である。

電池が切れるまで

生命の大切さ、生きる勇気、家族の大切さを感じ、考えることができる。

命の授業をもう一度（テレビ番組）

昨年他界した元養護教諭山田泉さんの命の授業の様子である。本や新聞記事等も関連させると効果的である。

レーナ・マリア物語（ビデオ）

両腕と片足の半分がないレーナさんが自分の夢に向かって力強く生きていく姿が、子どもたちに生きる勇気を与える。

その他

書籍：14歳いない子（ヨヅキ） 『葬式ごっこ』8年後の証言（豊田充）
母さん僕のために泣かないで（奥野真人） 等

音楽：償い（さだまさし） かあさんの下駄（中村ブン）
home（木山裕策） 22歳のひとり言（大野靖之）
手紙 ～拝啓 十五の君へ～（アンジェラ・アキ）等

「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年	小学校第5学年及び第6学年	中学校
<p>(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わかまをしないで、規則正しい生活をする。</p> <p>(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、じつかりと行う。</p> <p>(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。</p> <p>(4) うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸びびと生活する。</p>	<p>(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度ある生活をする。</p> <p>(2) 自分でやるうたを決めたことは、粘り強くやり遂げる。</p> <p>(3) 正しいと判断したことは、真意をもって行う。</p> <p>(4) 通話は素直に受け、正直に明るい心で元氣よく生活する。</p> <p>(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。</p>	<p>(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。</p> <p>(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力を大切にし、主体的で責任ある行動をする。</p> <p>(3) 自由を大切に、自覚的責任ある行動をする。</p> <p>(4) 誠実に、明るい心で楽しく生活する。</p> <p>(5) 真理を大切に、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。</p> <p>(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。</p>	<p>(1) 望ましい生活習慣を身につけ、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛ける生活をする。</p> <p>(2) より高い目標を自覚し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。</p> <p>(3) 自尊の精神を重んじ、主体的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。</p> <p>(4) 真理を求め、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。</p> <p>(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。</p>
<p>(1) 気持のよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。</p> <p>(2) 初い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、新登場にする。</p> <p>(3) 友達と仲良くし、助け合う。</p>	<p>(1) 礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接する。</p> <p>(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。</p> <p>(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。</p>	<p>(1) 時と場合をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。</p> <p>(2) だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立つて親切にする。</p> <p>(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合う。</p> <p>(4) 謙虚な気持ちを持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。</p> <p>(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにごたえる。</p>	<p>(1) 礼儀の意義を理解し、時と場合に応じた適切な言動をとる。</p> <p>(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。</p> <p>(3) 友誼の絆を理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。</p> <p>(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人権を尊重する。</p> <p>(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があつたことを理解して、</p> <p>(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の豊かさをもち謙虚に他に学ぶ。</p>
<p>(4) 日頃世話になっている人々に感謝する。</p>	<p>(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもちて接する。</p>	<p>(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにごたえる。</p>	<p>(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の豊かさをもち謙虚に他に学ぶ。</p>
3 主として自然や崇高なものの大切さを知る			
<p>(1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。</p> <p>(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。</p> <p>(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。</p>	<p>(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。</p> <p>(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。</p> <p>(3) 美しいものや崇高なものに感動する心をもつ。</p>	<p>(1) 生命の尊さを知り、自他の生命を尊重すること。</p> <p>(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。</p> <p>(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。</p>	<p>(1) 生命の尊さを理解し、かけがえない自他の生命を尊重すること。</p> <p>(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。</p> <p>(3) 人間には弱さや脆さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める。</p>
4 主として集団や社会のきまりを守り、公徳心をもつ			
<p>(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること。</p> <p>(2) 働くことの上さを感じて、みんなのために働く。</p> <p>(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。</p> <p>(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。</p> <p>(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛情をもつ。</p>	<p>(1) 約束や社会のきまりを守り、公徳心をもつ。</p> <p>(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。</p> <p>(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合つて楽しい家庭をつくる。</p> <p>(4) 先生や学級の人々を敬愛し、みんなが協力し合つて楽しい学級をつくる。</p> <p>(5) 郷土の伝統や文化を大切に、郷土を愛する心をもつ。</p> <p>(6) 我が国の伝統や文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。</p>	<p>(1) 公徳心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切に守り進んで義務を果たす。</p> <p>(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。</p> <p>(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。</p> <p>(4) 働くことの意味を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。</p> <p>(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。</p> <p>(6) 先生や学校の先生方への敬愛を深め、みんなが協力し合い、よりよい校風をつくる。</p> <p>(7) 郷土や我が国の伝統文化を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。</p> <p>(8) 外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の平和と人類の幸福に努める。</p>	<p>(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を謙遜に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。</p> <p>(2) 公徳心及び社会運轉の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。</p> <p>(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。</p> <p>(4) 自己が属する様々な集団の意義について理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。</p> <p>(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもつて、公共の福祉と社会の発展に努める。</p> <p>(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。</p> <p>(7) 学級や学校の一員としての自覚をもつて、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。</p> <p>(8) 地域社会の一員としての自覚をもつて郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。</p> <p>(9) 日本人としての自覚をもつて国を愛し、国家の発展に努める。</p> <p>(10) 世界中の日本人としての自覚をもつて、国際的視野で立つて、世界の平和と人類の幸福に貢献すること。</p>

道徳教育実践ハンドブック編集・執筆委員

編集委員長

渡邊忠美 元別府大学 教授

編集委員

石田裕明 中津市立北部小学校
安部友善 中津市立東中津中学校
藤澤宣弘 別府市立石垣小学校
和田苗美子 由布市立東庄内小学校
川本貴子 由布市立湯布院中学校
鳥倉秀聖 豊後大野市立朝地小学校
佐藤美登里 竹田市立竹田南部中学校
泉清一郎 日田市立三芳小学校
江田徳孝 日田市立北部中学校

執筆委員

乗原浩實	中津市立今津小学校	高橋雅浩	中津市立本耶馬溪中学校
天田真	豊後高田市立三浦小学校	佐伯修	豊後高田市立高田中学校
奥野清文	宇佐市立糸口小学校	田嶋恵子	大分市立城東中学校
奥陽子	杵築市立豊洋小学校	小野雅史	臼杵市立西中学校
友成寿子	国東市立豊崎小学校	伊東恵美	津久見市立第一中学校
小原徳三	日出町立藤原小学校	中濱和也	佐伯市立本匠中学校
古谷幸子	大分市立明野東小学校	首藤康章	佐伯市立昭和中学校
新納博文	臼杵市立下南小学校	熊田真路	日田市立前津江中学校
池見竜治	佐伯市立渡町台小学校	佐藤明彦	玖珠町立山浦中学校
桑島真弓	竹田市立豊岡小学校	竹内浩一	九重町立野上中学校
中村朋子	九重町立野上小学校		
安部圭子	九重町立東飯田小学校		

協力者

山本直哉	津久見市立堅徳小学校	財前恒治	豊後高田市立真玉中学校
増永伸也	佐伯市立松浦小学校	今永英俊	宇佐市立駅川中学校
梶原善人	日田市立出野小学校	長木英俊	国東市立来浦中学校
		江藤慶	日出町立日出中学校
		吉隆清美	豊後大野市立大野中学校

事務局

大分県教育庁義務教育課義務教育指導班内

大分市府内町 3-10-1 TEL 097-506-5533 (ダイヤル)

道徳教育実践ハンドブック

発行日 平成21年3月
編集・発行者 大分県教育庁 義務教育課
〒870-8503
大分市府内町3-10-1
TEL (097) 536-1111
印刷所 (株) 双林社